

山名土合遺跡 根小屋赤沼遺跡

主要地方道寺尾藤岡線社会資本総合整備事業に伴う
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2023

群 馬 県 高 崎 土 木 事 務 所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

主要県道寺尾藤岡線社会資本総合整備事業は、群馬県高崎市寺尾町と藤岡市藤岡を結び、当該地域の渋滞解消を目的としたバイパス整備です。

発掘調査を行いました、高崎市南八幡地区は烏川と鏑川に挟まれ、幾度となく水害に見舞われた地域です。また、全長65mの山名伊勢塚古墳を中心とした山名古墳群や、上野三碑の山上碑と金井沢碑が地区内に存在し、古くから歴史的に重要な地域として知られています。

本書で報告します山名土合遺跡・根小屋赤沼遺跡は令和3年度に公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施した遺跡です。遺跡の発掘調査では、縄文時代、古墳時代の遺物をはじめ、奈良時代から平安時代にかけての竪穴建物が確認され、古代の集落の一端が明らかになりました。

発掘調査から報告書刊行に至るまでには、群馬県高崎土木事務所、群馬県地域創生部、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会をはじめ、関係機関および地元関係者の皆様には多大なるご指導とご協力を賜りました。

本報告書の上梓にあたり、関係者の皆様に心から感謝申し上げますとともに、本書が高崎市南八幡地域における歴史の解明に広く役立てられることを念じて、序といったします。

令和5年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 向 田 忠 正

例　　言

- 1 本書は、主要県道寺尾藤岡線社会資本総合整備事業に伴う山名土合遺跡および根小屋赤沼遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 所在地 山名土合遺跡：群馬県高崎市山名町37-2、38-1、38-2、39-2、39-4
根小屋赤沼遺跡：群馬県高崎市根小屋町20-1、26、29-1、30-1
- 3 事業主体 群馬県高崎土木事務所
- 4 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 発掘調査期間および体制は以下の通りである。
事業名 平成30年度主要地方道寺尾藤岡線バイパス(山名工区)社会資本総合整備事業
履行期間 令和3年11月1日～令和4年1月31日
調査期間 令和3年11月1日～令和3年12月28日
調査担当 田村 博(主任調査研究員) 麻生敏隆(専門調査役)
調査面積 1,961.02m²(山名土合遺跡 717.51m²、根小屋赤沼遺跡 1,243.51m²)
遺跡掘削請負工事 有限会社 毛野考古学研究所
遺構地上測量 アコン測量設計株式会社
空中写真撮影 技研コンサル株式会社
- 6 整理事業期間および体制は以下の通りである。
事業名 令和4年度(主)寺尾藤岡線(山名東工区)社会資本総合整備(活力・重点)事業
履行期間 令和4年4月1日～令和5年3月31日
整理期間 令和4年11月1日～令和5年2月28日
遺物実測・観察表・写真撮影 石器 岩崎泰一(専門調査役) 土師器・須恵器 神谷佳明(専門調査役)
陶磁器 大西雅広(専門調査役) 金属製品 板垣泰之(専門員(主任))
デジタル編集・本文執筆 齊田智彦(主任調査研究員)
- 7 発掘調査諸資料および出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 8 発掘調査および整理事業・本報告書の作成には下記の機関よりご指導・ご教示を頂いた。
群馬県地域創生部文化財保護課、高崎市教育委員会

凡　例

- 1 報告書に用いた座標・方位は、すべて平面直角座標IX系(測地成果2011)を使用した。北方位はすべて座標北で、真北方向角は東偏0° 27' 58"である。
- 2 遺構・遺物の縮尺は、原則として以下の通りとし、それぞれスケールを明示した。

遺構 窓穴建物 1 : 60、1 : 30 窓穴状遺構 1 : 60 土坑・ピット 1 : 40 溝 1 : 80、1 : 40
烟 1 : 100、1 : 50

遺物 土器 1 : 3 石器・石製品 1 : 2、1 : 3 金属製品 1 : 2
- 3 遺構の主軸方向・走向を示すため、座標北を基準として東に傾いた場合はN-〇°-E、西に傾いた場合はN-〇°-Wというように表記した。遺構・遺物の計測値で、全体を計測できないものについては、現存の値を記載し()で表した。
- 4 遺物番号は出土遺構ごとの連番で、番号は本文・挿図・表・写真図版ともに一致する。
- 5 本書で使用したテフラの呼称は以下の通りである。

浅間 A 軽石 As-A(天明3年、1783年)
- 6 土層や土器の色調観察は、原則として農林水産省農林水産技術会議監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を使用した。
- 7 本書で使用した地図は以下の通りである。

国土地理院発行 20万分の1地勢図「宇都宮」「長野」平成10年
2万5千分の1電子地形図「高崎」平成30年
高崎市都市計画基本図 2500分の1 平成27年
- 8 本書で使用したトーンは以下の通りである。

遺物図	[■■■■■]	黒色	[●●●●●]	煙	[■■■■■]	煤	[●●●●●]	灰軸
遺構図	[■■■■■]	焼土	[●●●●●]	灰面	[●●●●●]	炭化物		

目 次

例言

凡例

目次

挿図目次

表目次

写真目次

第1章 調査の経過	(9) 遺構外出土遺物	42
第1節 発掘調査に至る経緯	1	
第2節 発掘調査の方法	2	
第3節 発掘調査の経過	4	
第4節 整理作業の経過	4	
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	第5章 総括	
第1節 遺跡の地形と立地	48	
第2節 周辺遺跡の分布	48	
第3節 基本土層	49	
第3章 山名土合遺跡の遺構と遺物	写真図版	
第1節 調査の概要	11	
第2節 検出された遺構と遺物	12	
(1) 竪穴建物	12	
(2) 竪穴状遺構	19	
(3) 土坑	20	
(4) ピット	21	
(5) 遺構外出土遺物	21	
第4章 根小屋赤沼遺跡の遺構と遺物	抄録	
第1節 調査の概要	22	
第2節 検出された遺構と遺物	22	
(1) 竪穴建物	22	
(2) 竪穴状遺構	33	
(3) 土坑	35	
(4) ピット	37	
(5) 溝	39	
(6) 流路	40	
(7) As-A処理遺構	41	
(8) 煙	42	

挿図目次

第1図 山名上合遺跡・根小屋赤沼遺跡と郡馬県の地勢	1	第25図 2号堅穴建物、3号堅穴建物出土遺物	25
第2図 山名上合遺跡と根小屋赤沼遺跡の位置	2	第26図 3号堅穴建物、4号堅穴建物	26
第3図 路線図と各堅跡の位置	3	第27図 4号堅穴建物出土遺物	27
第4図 調査区とグリッド設定図	3	第28図 5号堅穴建物	28
第5図 道路周辺の断面図	5	第29図 5号堅穴建物カマドと出土遺物(1)	29
第6図 道路周辺の地形	6	第30図 5号堅穴建物出土遺物(2)	30
第7図 周辺の遺跡	8	第31図 5号堅穴建物出土遺物(3)	31
第8図 山名上合遺跡・根小屋赤沼遺跡の基本土層と基本土層認証図	10	第32図 6号堅穴建物と出土遺物	32
（山名上合遺跡）			
第9図 山名上合遺跡 道構全体図	11	第33図 1号堅穴状道構と出土遺物	33
第10図 1号堅穴建物	12	第34図 2号堅穴状道構と出土遺物	33
第11図 1号堅穴建物カマド	13	第35図 3号堅穴状道構と出土遺物	34
第12図 1号堅穴建物出土遺物	14	第36図 4号堅穴状道構と出土遺物	34
第13図 2号堅穴建物	15	第37図 7号堅穴状道構と出土遺物	35
第14図 2号堅穴建物カマド	16	第38図 1号土坑	35
第15図 2号堅穴建物出土遺物	17	第39図 2号土坑から5号土坑と出土遺物	36
第16図 3号堅穴建物と出土遺物	18	第40図 埋没土分類によるピット位置図	37
第17図 4号堅穴建物	19	第41図 1号ピットから12号ピットと出土遺物	38
第18図 1号堅穴状道構	19	第42図 1号溝、2号溝と出土遺物	39
第19図 1号土坑、2号土坑と出土遺物	20	第43図 1号流路と出土遺物	40
第20図 1号ピット、2号ピット	21	第44図 As-As埋理道構と出土遺物	
第21図 道構外出土遺物	21	4号トレンチ・5号トレンチと出土遺物	41
（根小屋赤沼遺跡）			
第22図 1号トレンチから3号トレンチ断面図	22	第45図 1号掘	42
第23図 根小屋赤沼遺跡 道構全体図	23	第46図 道構外出土遺物(1)	42
第24図 1号堅穴建物と出土遺物	24	第47図 道構外出土遺物(2)	43

表 目 次

第1表 山名上合遺跡・根小屋赤沼遺跡の周辺遺跡	8	第3表 山名上合遺跡 遺物観察表	43
第2表 根小屋赤沼遺跡ピット計測表	38	第4表 根小屋赤沼遺跡 遺物観察表	44

写真目次

P L. 1	1 山名上合遺跡・根小屋赤沼遺跡 道路全景(北より)	P L. 6	1 2号堅穴建物概方全景(西より)
P L. 2	1 山名上合遺跡全景(東より)	2 2号堅穴建物カマド掘方(西より)	
	2 山名上合遺跡全景(南より)	3 2号堅穴建物カマド掘方土層断面B-B'(北より)	
P L. 3	1 1号堅穴建物出土状態(西より)	4 2号堅穴建物概方土層断面E-E'(西より)	
	2 1号堅穴建物土層断面A-A'(1)	5 2号堅穴建物防蔵穴土層断面C-C'(東より)	
	3 1号堅穴建物土層断面A-A'(2)	6 3号堅穴建物土層断面A-A'(西より)	
	4 1号堅穴建物全景(西より)	7 3号堅穴建物全景(西より)	
	5 1号堅穴建物カマド掘方土層断面(西より)	8 3号堅穴建物カマド掘方全景(西より)	
P L. 4	1 1号堅穴建物カマド上層断面C-C'(北より)	1 3号堅穴建物カマド掘方全景(西より)	
	2 1号堅穴建物カマド上層断面D-D'(西より)	2 3号堅穴建物カマド掘方土層断面B-B'(北より)	
	3 1号堅穴建物掘方全景(西より)	3 3号堅穴建物カマド下層方土層断面C-C'(西より)	
	4 1号堅穴建物カマド掘方全景(西より)	4 4号堅穴建物全景(西より)	
	5 1号堅穴建物カマド掘方土層断面C-C'(北より)	5 4号堅穴建物土層断面A-A'(西より)	
	6 1号堅穴建物カマド掘方土層断面B-B'(西より)	6 1号堅穴状道構上層断面A-A'(南より)	
	7 2号堅穴建物土層断面C-C'(西より)(1)	7 1号土坑土層断面(南より)	
	8 2号堅穴建物土層断面C-C'(西より)(2)	8 1号土坑全景(西より)	
P L. 5	1 2号堅穴建物遺物出土状態(西より)	P L. 8	1 2号土坑上層断面及び遺物出土状態(第19図1)(北より)
	2 2号堅穴建物遺物出土状態(第19図3、2、5)(北より)	2 2号土坑全景(北より)	
	3 2号堅穴建物カマド全景(西より)	3 1号ピット上層断面(南東より)	
	4 2号堅穴建物カマド上層断面D-D'(北より)	4 1号ピット全景(南東より)	
	5 2号堅穴建物カマド上層断面E-E'(西より)	5 2号ピット上層断面(南東より)	

P L . 9	1 粗小窓赤道跡全景(西より) 2 根小窓赤道跡全景(南より)	P L . 19	1 11号ビット上層断面(南西より) 2 11号ビット全景(南西より) 3 12号ビット上層断面(南西より) 4 12号ビット全景(南西より) 5 1号溝・2号溝上層断面a~A'(北東より) 6 1号溝・2号溝全景(北より) 7 1号流路上層断面(北西より) 8 1号流路上層断面(北より)				
P L . 10	1 1号窓穴建物全景(北西より) 2 1号窓穴建物上層断面a~B'・B~B''(北より) 3 1号窓穴建物遺物出土状態(第2図1)(北より) 4 1号窓穴建物カマド全景(北西より) 5 1号窓穴建物掘方全景(北西より)	P L . 20	1 As~A処理道構上層断面a~A'(西より) 2 As~A処理道構全景(西より) 3 1号烟土層断面(西より)(1) 4 1号烟土層断面(西より)(2) 5 1号烟土層断面(西より)(3) 6 1号煙全景(南より) 7 基本上層1(北東より) 8 基本上層2(北より)				
P L . 11	1 2号窓穴建物全景(北東より) 2 2号窓穴建物掘方全景(北東より) 3 3号窓穴建物全景(北東より) 4 3号窓穴建物遺物出土状態(北東より) 5 3号窓穴建物掘方全景(北東より) 6 3号窓穴建物焼上層出状態(東より) 7 4号窓穴建物上層断面a~A'(北より) 8 4号窓穴建物上層断面a~B'(西より)	P L . 21	遺物写真(1) P L . 22	遺物写真(2) P L . 23	遺物写真(3) P L . 24	遺物写真(4) P L . 25	遺物写真(5)
P L . 12	1 4号窓穴建物土層断面C~C'(西より) 2 4号窓穴建物遺物出土状態(西より) 3 4号窓穴建物P全景(西より) 4 4号窓穴建物貯藏穴全景(西より) 5 4号窓穴建物掘方全景(西より)	P L . 21	遺物写真(1) P L . 22	遺物写真(2) P L . 23	遺物写真(3) P L . 24	遺物写真(4) P L . 25	遺物写真(5)
P L . 13	1 5号窓穴建物遺物出土状態(西より) 2 5号窓穴建物上層断面a~A'・B~B'・C~C'(北西より) 3 5号窓穴建物土層断面a~B'(西より) 4 5号窓穴建物カマド上層断面(北東より) 5 5号窓穴建物貯藏穴全景(南より)	P L . 21	遺物写真(1) P L . 22	遺物写真(2) P L . 23	遺物写真(3) P L . 24	遺物写真(4) P L . 25	遺物写真(5)
P L . 14	1 6号窓穴建物全景(南東より) 2 6号窓穴建物カマド全景(西より) 3 6号窓穴建物カマド土層断面(北より) 4 6号窓穴建物カマド遺物出土状態(北より) 5 1号窓穴状道構上層断面(西より) 6 1号窓穴状道構全景(東より) 7 2号窓穴状道構全景(北より) 8 3号窓穴状道構全景(東より)	P L . 21	遺物写真(1) P L . 22	遺物写真(2) P L . 23	遺物写真(3) P L . 24	遺物写真(4) P L . 25	遺物写真(5)
P L . 15	1 4号窓穴状道構全景(東より) 2 7号窓穴状道構全景(東より) 3 1号土坑上層断面(南西より) 4 1号土坑全景(南西より) 5 2号土坑上層断面(南西より) 6 2号土坑全景(南西より) 7 3号土坑上層断面(南東より) 8 3号土坑全景(南より)	P L . 21	遺物写真(1) P L . 22	遺物写真(2) P L . 23	遺物写真(3) P L . 24	遺物写真(4) P L . 25	遺物写真(5)
P L . 16	1 4号土坑上層断面(南より) 2 4号土坑全景(南より) 3 5号土坑上層断面(東より) 4 5号土坑全景(東より) 5 1号ビット土層断面(南西より) 6 1号ビット全景(南西より) 7 2号ビット上層断面(南より) 8 2号ビット全景(南より)	P L . 21	遺物写真(1) P L . 22	遺物写真(2) P L . 23	遺物写真(3) P L . 24	遺物写真(4) P L . 25	遺物写真(5)
P L . 17	1 3号ビット土層断面(南より) 2 3号ビット全景(南より) 3 4号ビット土層断面(南西より) 4 4号ビット全景(南西より) 5 5号ビット土層断面(南より) 6 5号ビット全景(南より) 7 6号ビット土層断面(南西より) 8 6号ビット全景(南西より)	P L . 21	遺物写真(1) P L . 22	遺物写真(2) P L . 23	遺物写真(3) P L . 24	遺物写真(4) P L . 25	遺物写真(5)
P L . 18	1 7号ビット土層断面(西より) 2 7号ビット全景(南西より) 3 8号ビット土層断面(南西より) 4 8号ビット全景(南西より) 5 9号ビット土層断面(南西より) 6 9号ビット全景(南西より) 7 10号ビット土層断面(南より) 8 10号ビット全景(南より)	P L . 21	遺物写真(1) P L . 22	遺物写真(2) P L . 23	遺物写真(3) P L . 24	遺物写真(4) P L . 25	遺物写真(5)

第1章 調査の経過

第1節 発掘調査に至る経緯

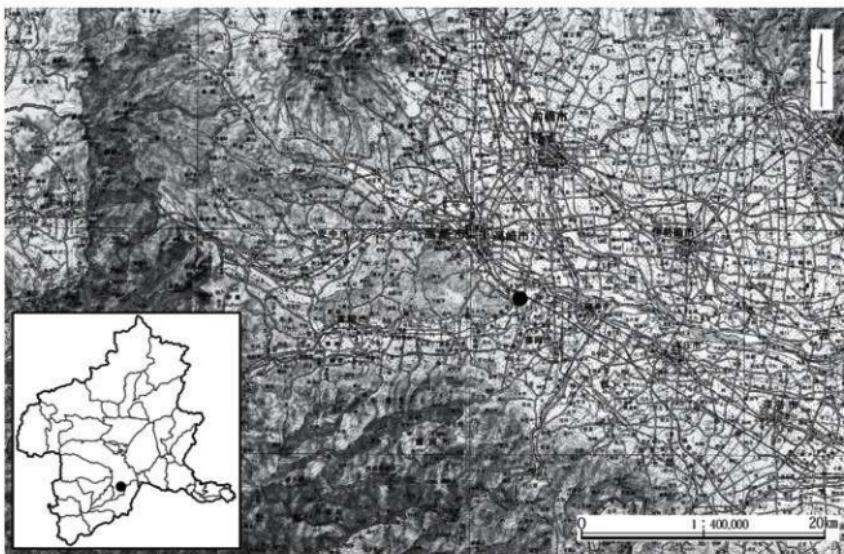
山名土合遺跡・根小屋赤沼遺跡は、群馬県の西部の高崎市山名町および根小屋町内に所在する。遺跡の北方約1.9kmには浅間山古墳、南方約2.3kmには七興山古墳、約1.1kmには山名伊勢塚古墳を中心とした山名古墳群などが存在する。またこの地域には「世界の記憶」に選出された上野三碑のうち山上碑と金井沢碑が存在する。

主要地方道寺尾藤岡線は、高崎市寺尾町を起点とし藤岡市藤岡をつなぐ全長9.4kmの道路である。県が定めている「はばたけ群馬・県土整備プラン」では「7つの交通軸」の整備が進められている。県土整備プランが実現すると、物流や日常生活に悪影響を与える慢性的な混雑や朝夕の渋滞を大幅に改善されるとしている。さらに主軸の整備だけではなく混雑の一因となっている地域に滞留する交通を、主軸に誘導するための軸間の連絡道路等の渋滞の解消が効果的であると考えられている。

主要地方道寺尾藤岡線山名工区は、高崎市根小屋町から藤岡市篠塚を結ぶ延長2.4km(高崎市内は2.2km)、幅14.5mのバイパス整備である。現道は朝夕に交通渋滞が発生するため地域住民からは、地域間の移動時間を短縮してほしい、道路の幅が狭く大型車の走行や歩行者、自転車の通行が非常に危険な状況であるとされている。

群馬県地域創生部文化財保護課(以下文化財保護課と略す)は、群馬県高崎土木事務所の照会を受け、令和3年7月に重機を用いた試掘調査を実施した。その結果、古代の生産址等が確認されたため、山名土合遺跡・根小屋赤沼遺跡として発掘調査の対象となった。

令和3年10月30日、文化財保護課の調整を受け群馬県高崎土木事務所と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団との間で発掘調査委託契約が締結され、令和3年11月1日より令和3年12月31日までの期間で発掘調査が実施されることとなった。



第1図 山名土合遺跡・根小屋赤沼遺跡と群馬県の地勢(国土地理院20万分の1地勢図「長野」「宇都宮」を加工)

第2節 発掘調査の方法

調査区・グリッドの設定と調査の方法

調査前には、調査区に単管パイプと安全ロープを巡らし、危険個所・立入禁止等の看板を設置して安全対策を行った。付近には、南八幡小・中学校の通学路となっている道路があるため、安全対策には十分留意した。また、調査事務所は、山名土合遺跡と柳沢川の間の事業地内に設置した。

山名土合遺跡・根小屋赤沼遺跡は、調査範囲が狭く道路等も存在しないため、調査区は分割せずに調査を実施した。遺構番号は遺跡ごとの通し番号としている。

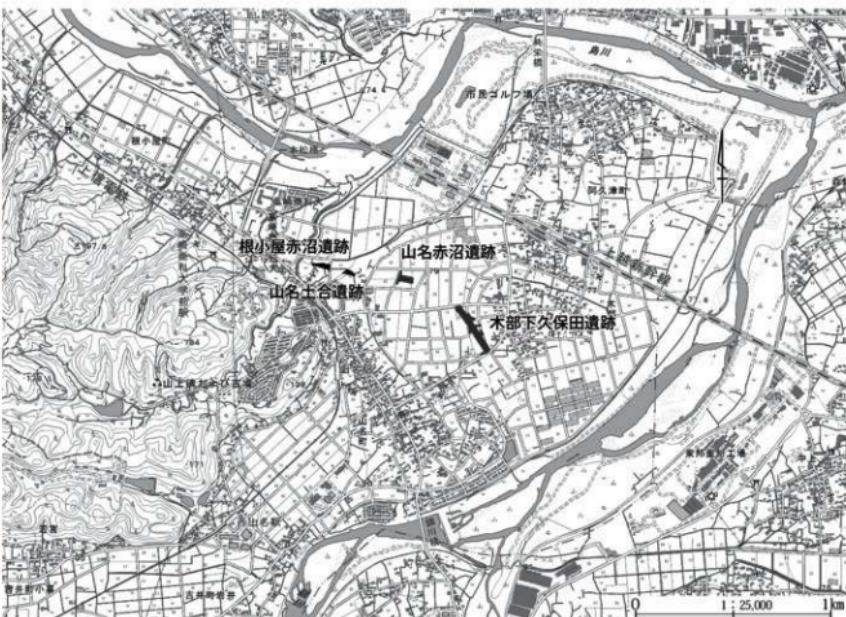
平面図を記録する測量用のグリッドは、平面直角座標系(測地成果2011)IX系を使用し、座標値の下3桁で呼称した。例え、X軸=31,600とY軸=-71,400の交点をそれぞれ600、-400と略し、この地点を南東隅とする5m四方の範囲を600-400グリッドと呼称した。

本遺跡では、バックフォーで表土を除去したのちに、鋤廉を用いて遺構面を精査し、遺構を確認した。その後、スコップや移植ゴテを用いて個別の遺構を掘削し、必要に応じてベルト設定や半截による土層観察を行った。

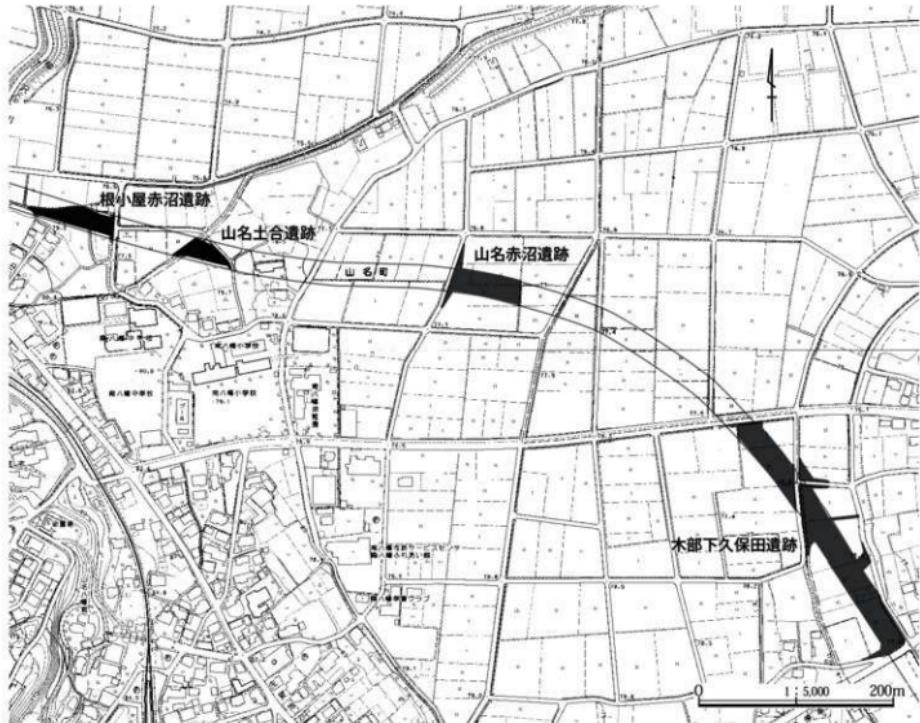
遺物が出土した場合には、現位置の記録の後に取り上げ、ラベルに出土位置の記録等を付して収納した。

遺構の記録は、デジタル測量による測図を原則とし、平面図は1/40縮尺図、断面図は1/20縮尺図、全体図は1/200縮尺図で作図した。

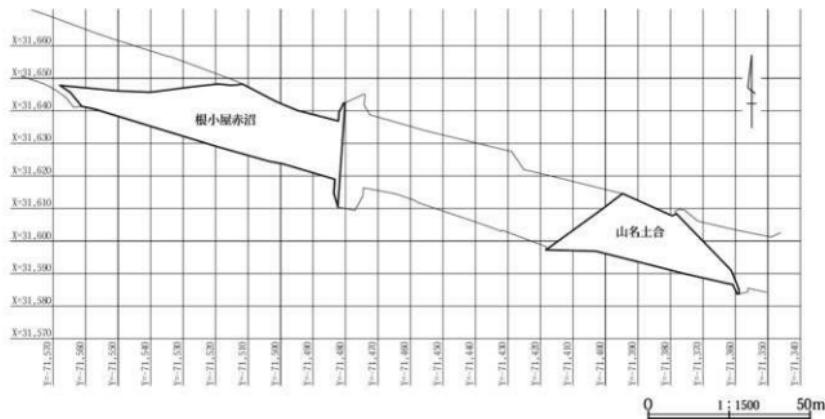
写真はフルサイズのデジタルカメラでの記録を基本とし、必要に応じてプローニー版による銀塙写真を併用した。撮影したデジタルデータは、調査区、遺構番号、撮影方向、撮影内容がわかるように、アルファベットとアラビア数字を用いてリネーム作業を行った。その後、ハードディスクとDVD-R等のメディアに保存した。



第2図 山名土合遺跡と根小屋赤沼遺跡の位置(国土地理院2万5千分の1地形図「高崎」を加工)



第3図 路線図と各遺跡の位置(高崎市都市計画基本図2500分の1を加工)



第4図 調査区とグリッド設定図

第3節 発掘調査の経過

調査経過の概略は以下のとおりである。

日誌抄

山名土合遺跡

令和3年

11月1日 表土掘削開始。

4日 遺構確認。

10日 土坑断面撮影。

11日 土坑、ピット平・断面測量。

12日 全景撮影。

15日 平面測量。1・2号竪穴建物調査開始。

22日 1・2号竪穴建物断面撮影。2号竪穴建物カマド断面撮影。

24日 1・2号竪穴建物断面測量。2号竪穴建物カマド断面測量。

25日 1号竪穴建物カマド断面撮影。

26日 竪穴状遺構調査。

12月1日 1・2号竪穴建物掘方撮影。3号竪穴建物調査。

2日 3・4号竪穴建物調査開始。

3日 1～4号竪穴建物撮影・測量。

10日 空中写真撮影。

16日 重機による整地作業。

30日 調査終了。

根小屋赤沼遺跡

令和3年

11月8日 斜面部分トレンチ調査開始。

10日 斜面部分トレンチ撮影。

11日 斜面部分トレンチ測量。

12日 表土掘削、遺構確認。

25日 1号竪穴建物掘削開始。

26日 竪穴状遺構、3～7号竪穴建物撮影・測量。

30日 5～10号竪穴状遺構調査。

2・3号土坑およびピット撮影。

12月1日 5・6・8・11号竪穴状遺構は竪穴建物に変更。

6日 6号土坑削除・撮影・測量。

9日 1号溝は1・2号溝に変更。1号窓検出。

10日 空中写真撮影。1号窓および10～12号ピット掘削・撮影・測量。

13日 南八幡小学校児童、南八幡中学校生徒による見学。

14日 1～5号竪穴建物撮影。4～6号トレンチ掘削。

15日 南八幡小学校児童、南八幡中学校生徒による見学。

16日 4・5号竪穴建物測量。

20日 重機による整地作業。

30日 調査終了。

第4節 整理作業の経過

整理事業については、文化財保護課の調整を受け、群馬県高崎土木事務所と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団との間で、令和4年4月1日に事業の委託契約が交わされた。そして、令和4年11月1日より同事業団本部にて整理作業を開始した。

すでに洗浄・注記を済ませ、収納してあった遺物を分類したのち、遺構ごとに接合作業を行った。その後、図化する個体を選定後、復元・写真撮影、実測・探査、観察作業を行った。

実測は三次元計測器や長焦点の実測用写真を併用しながら行った。土器はロットリングによるトレース後、スキヤニングによりデジタル化したものである。遺物写真はフルサイズのデジタルカメラにより撮影後、色調等を調整した。

遺構は、調査段階でデジタルデータ化しており、これを編集して完成図面とした。また、遺構写真は、発掘調査で撮影したデジタル写真から掲載写真を選択し、色調等の調整後デジタル入稿用データを作成した。

これらの作業と並行して本文および観察表と原稿を執筆し、デジタルデータ化した遺構図・遺物図とあわせてアドビ社のインデザインを使用してデジタル入稿データを編集した。

令和5年1月31日に整理作業を完了し、出土遺物・図面・写真類の収納作業を終了した。そして令和5年3月に発掘調査報告書「山名土合遺跡・根小屋赤沼遺跡」を刊行した。

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 遺跡の地形と立地

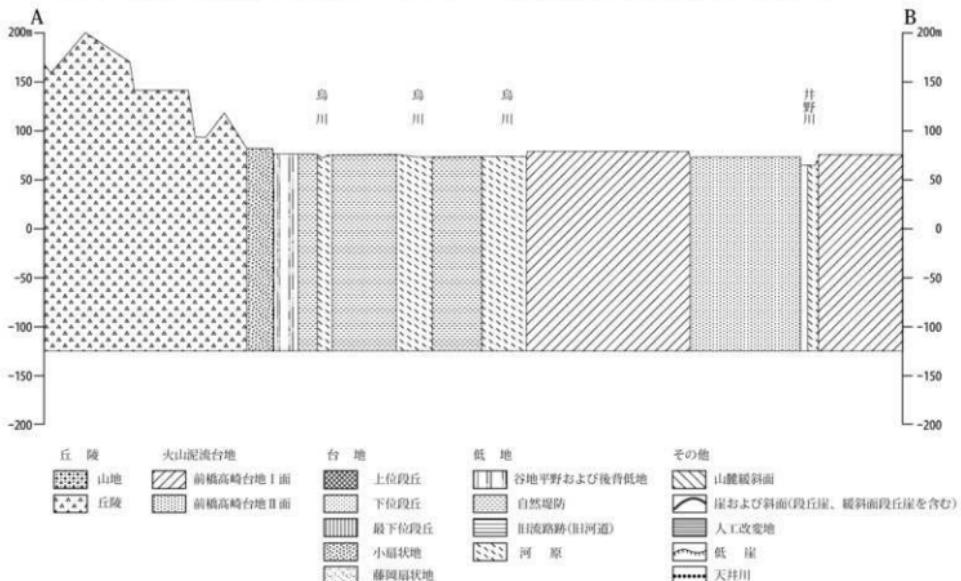
山名土合遺跡・根小屋赤沼遺跡は、上信電鉄高崎商科大学前駅より南南東へ約700m、群馬県高崎市山名町・根小屋町に所在し、標高は79.2mを測る。北方には烏川、南方には鎌川が流れ、二つの川は遺跡の北東約2km付近で合流する。この付近一帯は、洪水に見舞われることが多く、明治43年8月の洪水では、烏川や鎌川の堤防が決壊したため、多野郡八幡村(現在の南八幡地区)では、被害が甚大であったとの記録が残っている。

高崎市の西部には岩谷野丘陵が広がっている。この丘陵は、市全体の15%程度の面積を占めている(平成の合併以前の高崎市)。岩谷野丘陵は碓氷川、高田川、鎌川、烏川に囲まれた地域で、地元では親音山と呼ばれることが多い。特徴的なのは尾根の高さが標高200~250mにそろっていて、河川による浸食により急崖が多いことである。

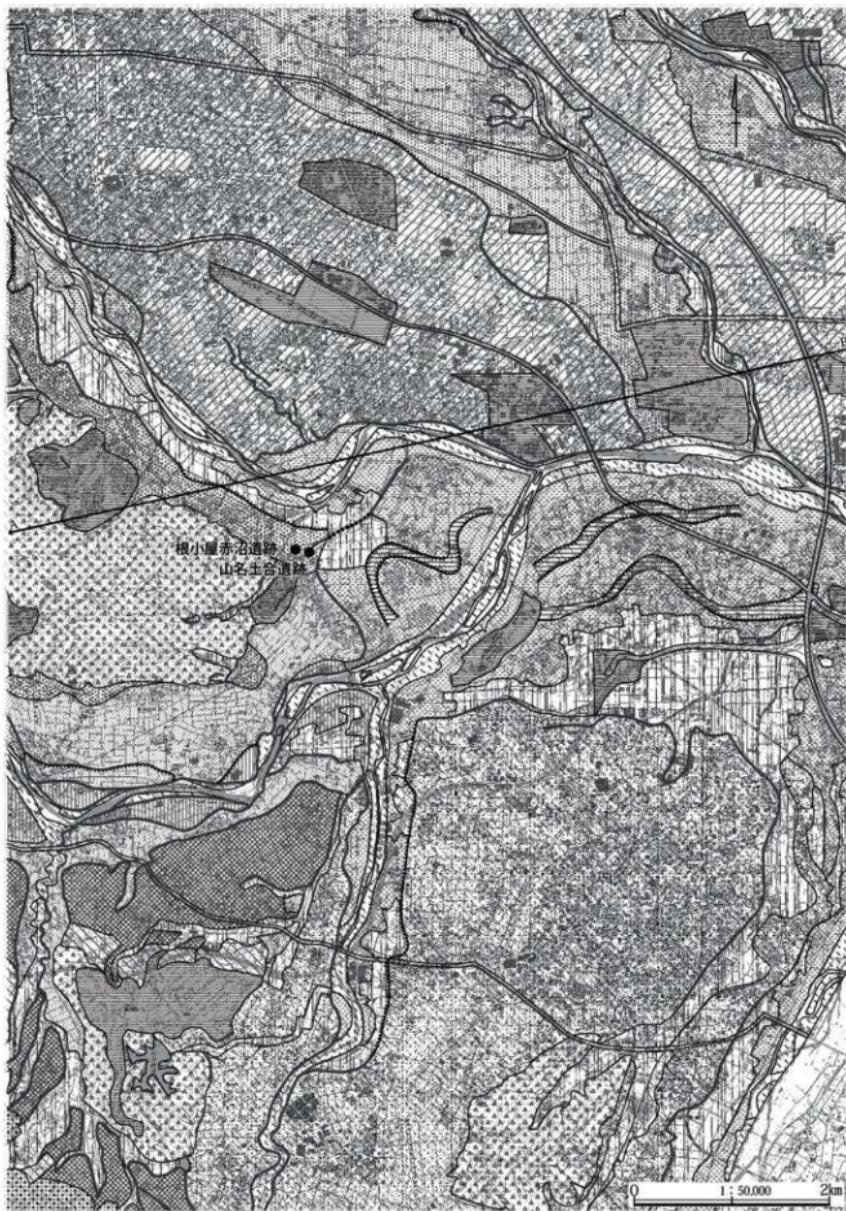
丘陵を構成するのは板鼻層と呼ばれる地層で、約800万年前に海岸に堆積した砂や礫から成る。そのほか、植物化石から形成された亜炭層、火山灰地層なども見受けられる。

烏川右岸の山名町、根小屋町、木部町、阿久津町では現在でも旧河川の様子が地形に残されている。この一帯は氾濫原の中にあるが、かつて自然堤防だったところは古くから宅地や畑、道路に利用されている。一方、旧流路や後背湿地だったところは、もともと畑であったが、現在では土地改良が進み、水田として利用されている。

丘陵の縁辺には小規模で急な傾斜をもつ扇状地が形成されている。遺跡の北部には根小屋七沢と呼ばれる河川がある。大雨のときに流路からあふれた土砂を流路に盛り返したために、周囲の土地から高いところを流れる天井川の状態になっている。遺跡は、根小屋七沢の一つである柳沢川が形成した小扇状地上に位置する。



第5図 遺跡周辺の断面図(土地分類基本調査「高崎」から作成)



第6図 遺跡周辺の地形(土地分類基本調査「高崎」から作成)

第2節 周辺遺跡の分布

本遺跡の調査によって確認された遺構は、中近世の遺構が中心である。本節では、周辺に広がる遺跡について概観する。

旧石器時代 高崎市内において旧石器時代の遺跡は少なく、近隣に遺跡は存在しない。岩野谷丘陵北斜面の、少林山台遺跡(図範囲外)から、黒曜石製槍先形尖頭器と黒色頁岩製の柳葉形の槍先形尖頭器が出土している。

繩文時代 八幡山遺跡(7)からは、前期後半諸磯b式期の土器に混じって土偶1点が出土している。山名柳沢遺跡(6)では、花積下層式期、黒浜式期、諸磯b式期、諸磯c式期の竪穴建物が、山名戸矢遺跡(16)では後期の竪穴建物が確認されている。

弥生時代 周辺には弥生時代の遺跡は存在しないが、山名田中地遺跡(18)から、中期前半から中葉期と考えられる弥生土器片が採取されている。

古墳時代 上毛古墳綜覧(昭和10年版)では、旧多野郡八幡村には77基の古墳の存在が確認されている。そのうちの50基は円墳で残りは形式不明である。市指定遺跡の山名古墳群には、前方後円墳の山名伊勢塚古墳(20)、山名原口I遺跡1号墳(19)をはじめ、後期群集墳を形成している。山名古墳群では、「模様積石室」と呼ばれる特徴的な横穴石室が散見する。これは、鮎川・鏑川・烏川の結晶片岩を積み上げたものである。

山名古墳群と鏑川を挟んだ対岸には、大型前方後円墳の七興山古墳(58)、模様積石室の伊勢塚古墳(52)がある。

烏川対岸には倉賀野古墳群が存在する。その中心は、中期前半の大型の前方後円墳の浅間山古墳(35)、大鶴巻古墳(40)、小鶴巻古墳(39)などである。倉賀野古墳群の北西にある佐野古墳群にも多くの古墳が分布している。後期の前方後円墳の漆山古墳(27)や大型円墳の藏王塚古墳(26)をはじめ、長山古墳(25)、長者屋敷天王山古墳(32)などが分布する。そして、終末期には山上古墳(9)、安楽寺古墳(43)などが築造される。

集落は、田端遺跡(12)、山名戸矢遺跡(16)などがある。田端遺跡からは玉造工房が確認され、建物の主軸方向・規模・平面形状に規則性が認められるなど、計画的な集落を形成していたものと思われる。山名戸矢遺跡では、

後期の竪穴建物や土坑は山名古墳群の造営時期とほぼ重なっている。

奈良・平安時代 山名柳沢遺跡(6)、田端遺跡(12)、山名戸矢遺跡(16)、山名原口I遺跡(19)などがあげられる。山名柳沢遺跡では羽口・鉄滓・垣壁などが出土した竪穴建物が、田端遺跡では160軒を超える竪穴建物が調査された。また、山名戸矢遺跡の平安時代の竪穴建物からは、「辛枚万呂」と刻字された瓦が出土している。山名原口I遺跡の竪穴建物は、古墳群を避けた地点で確認されている。

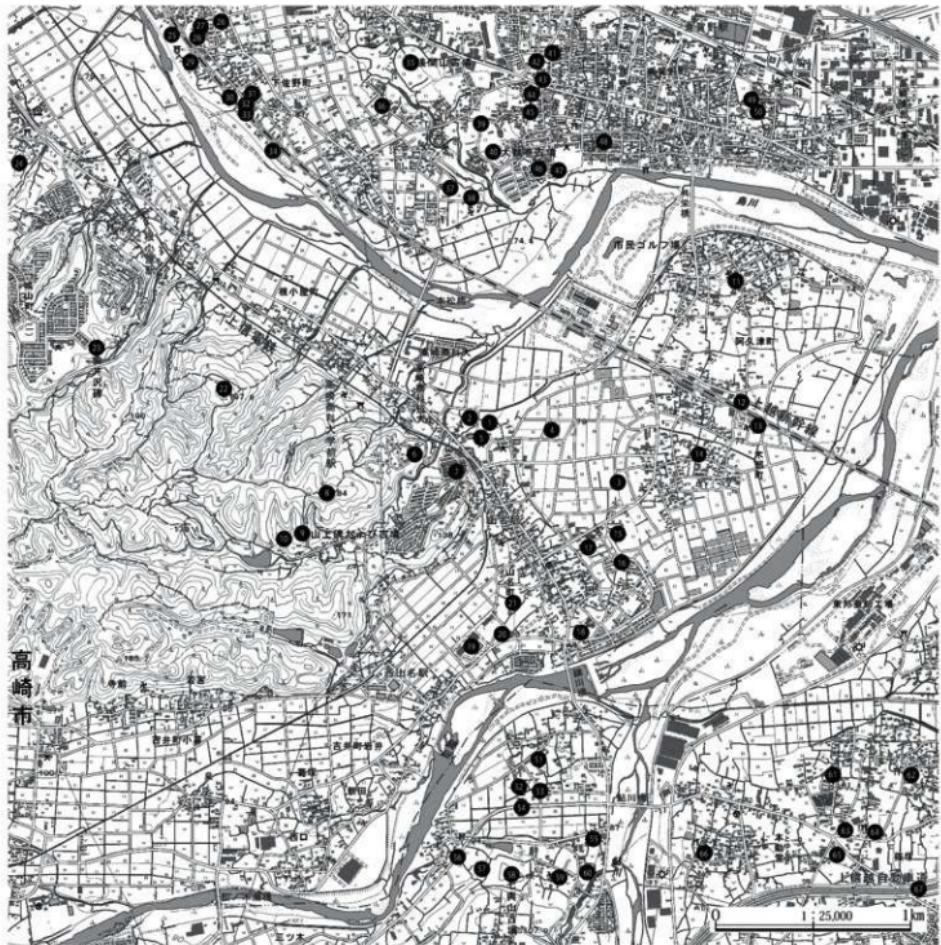
本遺跡の西方の岩野谷丘陵には、世界の記憶に登録された上野三碑のうち、金井沢碑(23)と山上碑(9)が存在する。681年に建てられたとされる山上碑には「佐野三家」の文字が刻まれ、放光寺の僧の長利が建立したと考えられている。また、726年に建てられた金井沢碑には「群馬郡下賛郷」と刻まれており、県内で初めて「群馬」の文字が使われている。

中・近世 多数の城館が確認されている。平地部には木部氏館(13)、木部氏の支城となる木部北城(11)、木部城(14)、山名館(17)、岩野谷丘陵には根小屋城(22)、山名城(8)、寺尾茶臼山城(24)などが分布している。

烏川の対岸には、倉賀野氏が築いたと言われる倉賀野城(48)をはじめ、倉賀野西城(45)、倉賀野東城(50)など、多数の城館が築かれている。

城館以外の遺構として、山名原口I遺跡(19)から竪穴状遺構、山名土合古墳群(5)からは、銭貨・すり鉢片・板碑片などが古墳の周溝より出土している。山名戸矢遺跡(16)の集石遺構のうち3基が中世の可能性が高いとされている。田端遺跡(12)では掘立柱建物・土坑墓・溝のほか館の堀も確認され、白磁皿・青磁碗類・内耳銅・茶臼・五輪塔など、遺物も多数出土した。

近世になると、烏川対岸の倉賀野町には宿場町が、現在の共栄橋付近には倉賀野河岸が形成され、宿場町や海運の拠点として繁栄した。



第7図 周辺の遺跡(国土地理院2万5千分の1地形図「高崎」を加工)

第1表 山名土合遺跡・根小屋赤沼遺跡の周辺遺跡

遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中・近世	文献
1 山名土合遺跡	○				○		本報告
2 根小屋赤沼遺跡				○	○		本報告
3 木部下久保田遺跡		○			○		「木部下久保田遺跡・山名赤沼遺跡」2022 群理文
4 山名赤沼遺跡				○	○		「木部下久保田遺跡・山名赤沼遺跡」2022 群理文
5 山名土合古墳群				○			高崎市教育委員会 1995 「平成6年度 高崎市内小堀模擬城文化財緊急発掘調査概要」
6 山名柳沢遺跡	○		○	○	○		「山名柳沢遺跡」1998 高崎市遺跡調査会
7 八幡山遺跡	○				○		新編「高崎市史」1996 資料編1 原始古代1
8 山名城					○		新編「高崎市史」1996 資料編3 中世1
9 山上碑および古墳				○	○		新編「高崎市史」1996 資料編1 原始古代1
10 でえせいじ道路					○		新編「高崎市史」2003 通史編1 原始古代

	遺跡名	巨石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中・近世	文献
11	木部北城					○	○	新編『高崎市史』1996 資料編3中世Ⅰ
12	田端遺跡				○	○	○	『田端遺跡』1988 群理文
13	木部氏館					○	○	新編『高崎市史』1996 資料編3中世Ⅰ
14	木部城					○	○	新編『高崎市史』2017 高崎市教委
15	山名若宮遺跡					○	○	『山名若宮遺跡』2017 高崎市教委
16	山名戸矢遺跡	○			○	○	○	『山名戸矢遺跡』1993 高崎市遺跡調査会
17	山名館					○	○	新編『高崎市史』1996 資料編3中世Ⅰ
18	山名田中地遺跡		○				○	新編『高崎市史』1996 資料編1原始古代Ⅰ
19	山名原1丁目遺跡			○	○	○	○	『山名原1丁目遺跡』1990 高崎市教委
20	山名伊勢塚古墳				○			『山名伊勢塚古墳』2008 高崎市教委
21	山名原1丁目遺跡				○			『山名原1丁目遺跡』1991 高崎市教委
22	相小原城					○	○	新編『高崎市史』1996 資料編3中世Ⅰ
23	金井4号碑					○	○	新編『高崎市史』1996 資料編1原始古代Ⅱ
24	寺尾茶臼山城					○	○	新編『高崎市史』1996 資料編3中世Ⅰ
25	長山古墳				○			群理文77集
26	藏王塚古墳				○			群理文77集
27	漆山古墳				○			新編『高崎市史』1996 資料編1原始古代Ⅰ
28	瓶口刷敷					○	○	新編『高崎市史』1996 資料編3中世Ⅰ
29	清水園古墳					○	○	群理文77集
30	下佐野遺跡Ⅰ・Ⅱ地区	○						
31	下佐野一木本遺跡					○	○	高崎市78集
32	長者屋敷天王山古墳					○		新編『高崎市史』1996 資料編1原始古代Ⅰ
33	夕闌長者屋敷						○	群理文77集
34	下佐野長者屋敷遺跡				○	○	○	高崎市239集
35	浅間山古墳					○		新編『高崎市史』1996 資料編1原始古代Ⅰ
36	庚申塚古墳					○		
37	大山古墳					○		
38	茶臼山古墳					○		
39	小鶴巣古墳					○		新編『高崎市史』1996 資料編1原始古代Ⅰ
40	大鶴巣古墳					○		新編『高崎市史』1996 資料編1原始古代Ⅰ
41	上稲荷前山敷					○		新編『高崎市史』1996 資料編3中世Ⅰ
42	倉賀野条里Ⅰ～V遺跡					○	○	高崎市教委244、116、287、52、220
43	安樂寺古墳					○		新編『高崎市史』1996 資料編1原始古代Ⅰ
44	一本杉古墳					○		新編『高崎市史』1996 資料編1原始古代Ⅰ
45	倉賀野西城					○		高崎市遺跡調査会 26
46	倉賀野1丁福寺遺跡Ⅰ・Ⅱ	○				○		高崎市遺跡調査会 4
47	倉賀野宮之前遺跡					○		高崎市24集
48	倉賀野城					○		新編『高崎市史』1996 資料編3中世Ⅰ
49	長賀寺古墳					○		
50	倉賀野東城					○		新編『高崎市史』1996 資料編3中世Ⅰ
51	岡の野					○		『藤岡市史資料編 原始・古代・中世』1993 藤岡市史編纂委員会
52	伊勢塚古墳					○		『藤岡市史資料編 原始・古代・中世』1993 藤岡市史編纂委員会
53	上落合岡田遺跡				○	○	○	『上落合岡田遺跡』2001 藤岡市教委
54	上落合岡道跡			○	○	○	○	『上落合岡道跡(本文編)』2004 藤岡市教委
55	落合の野						○	『藤岡市史資料編 原始・古代・中世』1993 藤岡市史編纂委員会
56	上落合上野遺跡	○	○	○	○	○	○	『上落合上野遺跡』2003 藤岡市教委
57	上落合上廻遺跡					○	○	『七興山古墳』2010 群理文
58	七興山古墳					○		『七興山古墳』2010 群理文
59	宗永寺裏東塚古墳					○		『藤岡市史資料編 原始・古代・中世』1993 藤岡市史編纂委員会
60	上落合城山遺跡					○	○	『上落合城山遺跡・白石橋荷原遺跡・猿田川水田址遺跡』2002 藤岡市教委
61	西原遺跡		○			○		『藤岡市史資料編 原始・古代・中世』1993 藤岡市史編纂委員会
62	鎌塚館						○	
63	下木ノ遺跡					○		群馬県藤岡市教育委員会1994「年報(9)」
64	鎌塚越遺跡					○	○	群馬県藤岡市教育委員会1999「年報(14)」
65	北原遺跡					○		『藤岡市史資料編 原始・古代・中世』1993 藤岡市史編纂委員会
66	動堂城							
67	上栗須寺前遺跡群		○		○	○	○	『上栗須寺前遺跡群Ⅰ～Ⅲ』1992 1994 1996 群理文

第3節 基本土層

山名土合遺跡の基本土層は、調査区の西端の北側壁と、2号土坑で観察をした。IV層下面を遺構確認面として調査を行った。

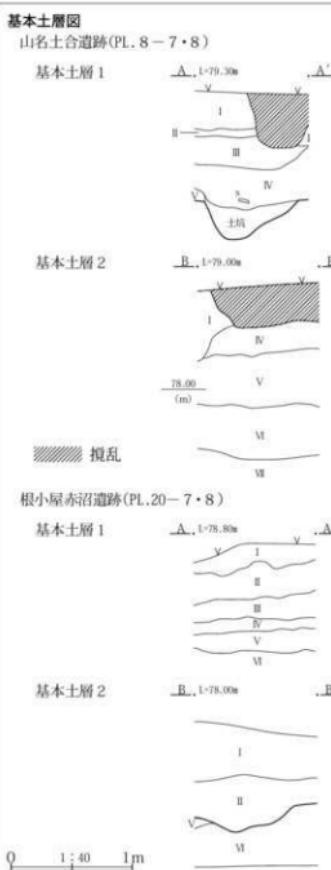
根小屋赤沼遺跡の基本土層は、調査区中央部やや東寄りの南壁とAs-A処理遺構の土層断面で確認をした。調査区の最高地点と東端および北壁の比高差が40cmほどあるため、観察地点により土層の堆積状況は異なっている。原則としてⅢ層下を遺構確認面として、調査を進めた。

山名土合遺跡基本土層

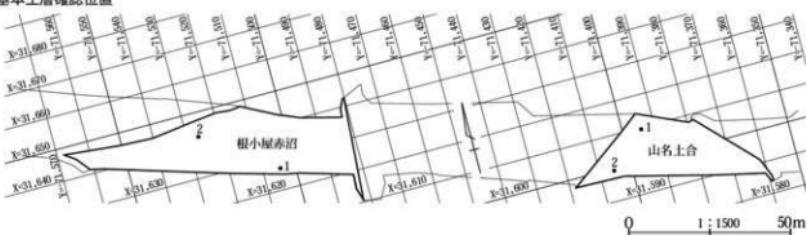
- I 暗褐色土(10YR3/3)現表土。客土。
- II 黒褐色土(10YR2/2)小礫混じる。古代。
※断片的で調査区全域には分布しない。
- III にぶい黄褐色粘質土(10YR5/4)砂礫混じる(20~30%程度)。山崩れか。上層部に羽釜(鑿片)・鐵文上器(加賀利E3式深鉢片)出土。
※断片的で調査区全域には分布しない。
- IV 黄褐色砂礫(10YR4/4)山崩れか。鐵文上器(加賀利E3式深鉢片)出土。
- V 褐色粘質土(10YR4/6)水成堆積。
※V層上面で遺構確認。
- VI 晴褐色粘質土(10YR3/4)水成堆積。
- VII 砂砾。

根小屋赤沼遺跡基本土層

- I 現表土。
- II 黒褐色砂質土(10YR3/2) As-A混上。
- III 黑褐色土(10YR2/2)直径1.5~2 cmの小礫を5%程度含む。古代。
※山名土合遺跡Ⅱ層に同じ。
- IV 灰褐色粘質土(10YR4/4)直径1~2 cmの小礫を5%程度含む。
- V 晴褐色粘質土(10YR3/3)直径1~3 cmの小礫を30%程度含む。
※山名土合遺跡Ⅳ層に同じ。
- VI 黒褐色砂礫(10YR3/1)※山名土合遺跡IV層に同じ。



基本土層確認位置



第8図 山名土合遺跡・根小屋赤沼遺跡の基本土層と基本土層確認位置図

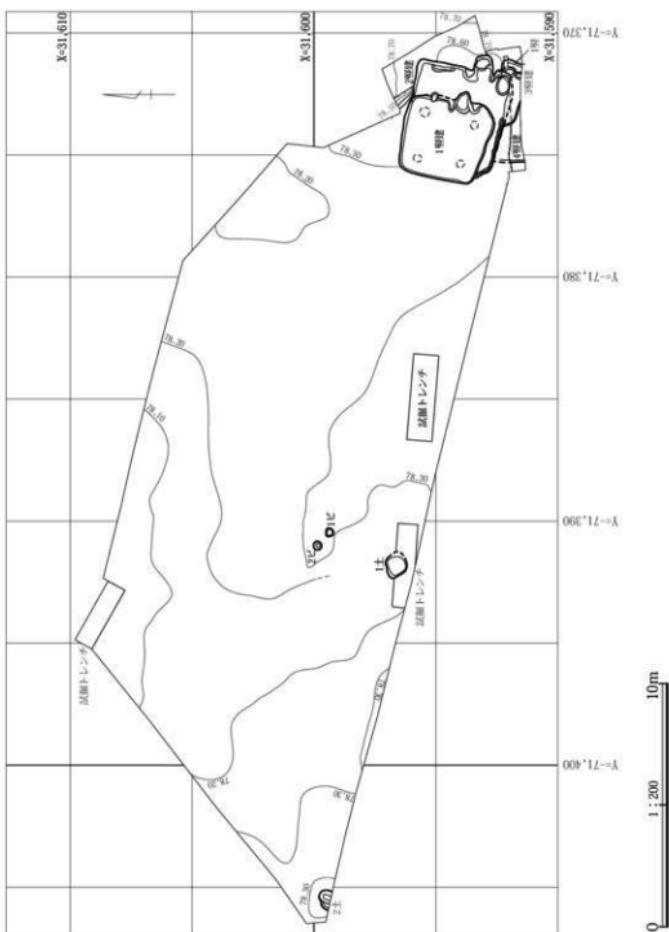
第3章 山名土合遺跡の遺構と遺物

第1節 調査の概要

調査は、令和3年11月から12月までの期間で実施した。基本土層Ⅲの上面を遺構確認面として開始したが、遺構を確認することはできなかった。そのため、表土から60～90cm掘り下げた基本土層IV層下面を第1面とし調査す

ることとなった。

調査区はほぼ平坦で、西側には搅乱が多く、遺構は希薄であった。調査区東側では、平安時代の竪穴建物を検出した。確認された遺構は、竪穴建物4棟、竪穴状遺構1棟、土坑2基、ピット2基である。



第9図 山名土合遺跡 遺構全体図

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 竪穴建物

1号竪穴建物(第10~12図 PL. 3・4・21 遺物観察表P.43)

位置 X=31,592~31,596 Y=-71,372~-71,376

重複 2・3・4号竪穴建物に後出する。

平面形 隅丸方形。

規模 長軸3.48m以上 短軸3.36m以上

残存壁高 0.23m

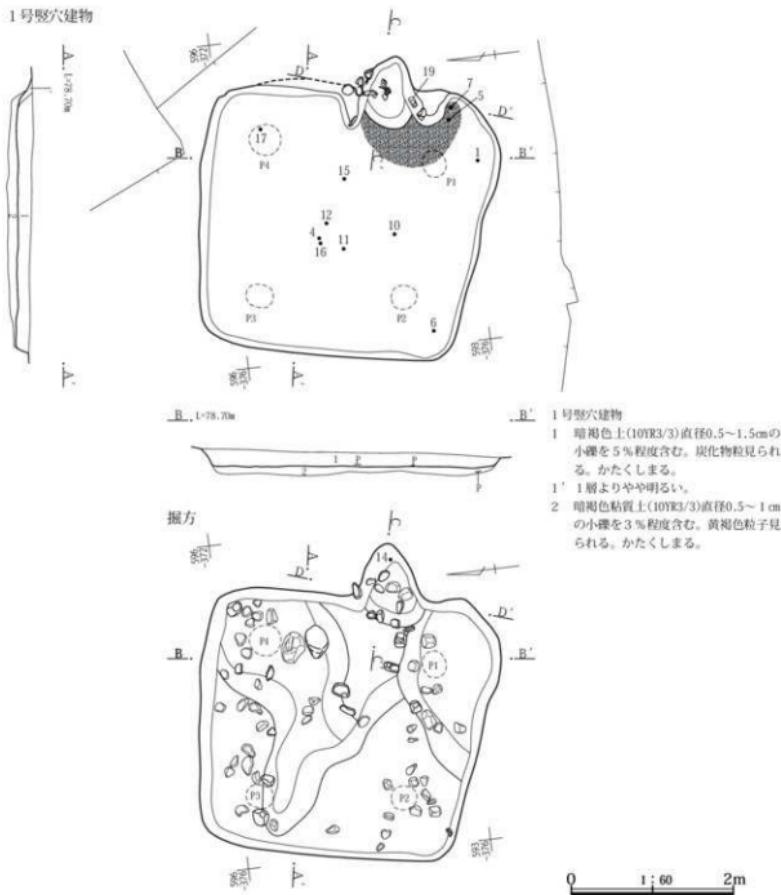
床面積 9.54m²

主軸方位 N-110°-E

検出・埋没状況 表土を除去し、遺構確認面を精査したが遺構の輪郭を検出できなかった。そのため、遺構確認トレンチを設定しつつ基本土層IV層を掘り下げたところ、竪穴建物を検出した。埋没土は細礫を少量含む暗褐色土を主体とし、炭化物粒が混じる。

柱穴 床面では柱穴を確認することができなかった。掘

1号竪穴建物



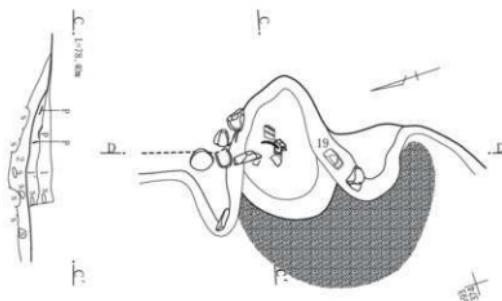
第10図 1号竪穴建物

方では、地山の礫が取り除かれた部分を4か所検出した。主柱穴の痕跡と推定される。規模は以下のとおりである。

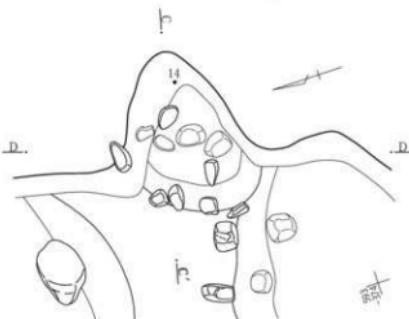
P 1 長径(0.34)m 短径(0.28)m 深さ 不明
 P 2 長径(0.32)m 短径(0.30)m 深さ 不明
 P 3 長径(0.34)m 短径(0.29)m 深さ 不明
 P 4 長径(0.39)m 短径(0.38)m 深さ 不明

カマド 東壁に敷設されていた。残存するカマドの規模は確認長0.87m、幅1.37m、煙道部長・燃焼部長・煙道部幅 計測不可 焚口幅0.74mである。カマド袖の遺存状況が悪いため、構築状況は明らかにすることができないが、カマド周辺の礫は袖石に使用されていたと考えられる。

1号竪穴建物カマド



カマド掘方



0 1:30 1m

貯蔵穴・壁際溝 確認できなかった。

掘方 床面から最大で厚さ0.12mほど下位で掘方面を検出した。地山には礫が多く含まれ、床下土坑等は、認められなかった。掘方は暗褐色粘質土が主体で、細礫を微量含んでおり、硬くしまっていた。

遺物と出土状況 図示できた土器は土師器3点と須恵器13点、黒色土器1点、灰釉陶器1点である。須恵器は、皿(第12図1)1点、杯6点(第12図3~8)、椀4点(第12図9~12)、甕口縁から頸部片1点(第12図17)、蓋1点(第12図18)、黒色土器は、杯(第12図2)、土師器は、甕口縁から胴部片3点(第12図14~16)、灰釉陶器は椀(第12図13)を掲載した。これらのうち床直上から出土した

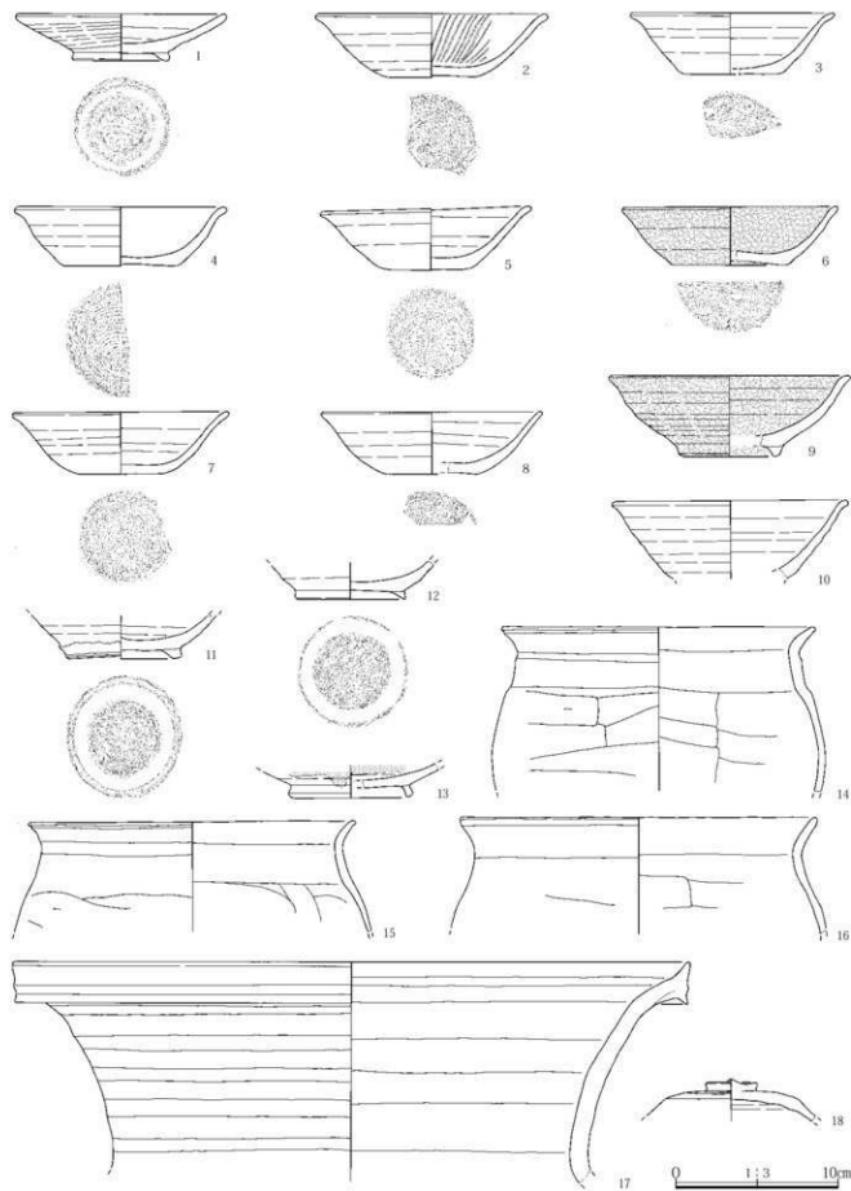
ものは、1・5・7・15~17の7点である。このほか、カマド天井石(PL.21-19)を写真のみ掲載した。

調査所見 土師器甕は頸部がやや内側に倒れ器壁が厚くなることから9世紀後半期の竪穴建物と考えられる。18以外は共伴関係にも問題はない。

1号竪穴建物カマド

- 1 黒褐色土(10YR2/2)直径0.5~2cmの小礫を5%程度含む。燒土粒・炭化物粒見られる。かたくしまる。
- 1' 1層より砂質。
- 2 黑褐色土(10YR2/3)直径0.5~3cmの小礫を10%程度含む。燒土粒見られる。

第11図 1号竪穴建物カマド



第12図 1号堅穴建物出土遺物

2号竪穴建物



2号竪穴建物貯藏穴

1 黒褐色土(10YR2/2)直径0.5~1cmの小礫を3%程度、直徑1mmの炭化物粒を1%程度含む。かたくしまる。やや砂質。

2号竪穴建物

- 1 黒褐色砂質土(10YR3/4)直径0.5~1.5cmの小礫を10%程度含む。黄褐色粒子・炭化物粒見られる。
- 2 黄褐色粘質土(10YR3/3)直径0.5~1cmの小礫を3%程度含む。黄褐色粒子見られる。かたくしまる。

2号竪穴建物(第13~15図 PL. 4~6・21 遺物観察表P.43・44)

位置 X=31,591~31,595 Y=-71,370~-71,375

重複 3・4号竪穴建物に後出し、1号竪穴建物に先んずる。

平面形 1号竪穴建物と重複のため不明。

規模 長軸(4.56)m 短軸3.92m以上

残存壁高 0.36m

床面積 (14.43)m²

主軸方位 N-98°-E

検出・埋没状況 1号竪穴建物と同様に確認面を精査したところ、遺構の輪郭を検出した。埋没土は細礫を少量含む暗褐色土を主体とする。炭化物粒が認められる。

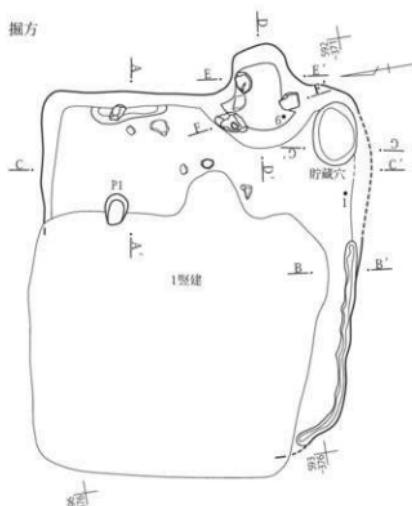
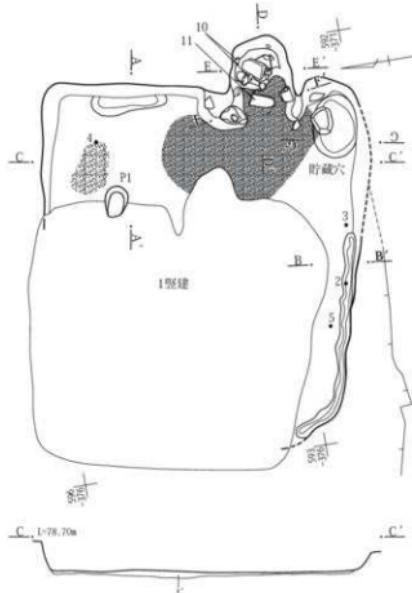
柱穴 主柱穴1本が検出された。主柱穴の規模は下記の通りである。

P1 長径0.38m 短径0.28m 深さ0.21m

カマド 東壁に敷設されていた。残存するカマドの規模は確認長1.10m、幅1.39m、煙道部長0.56m、燃焼部長0.54m、煙道部幅0.72m、焚口幅0.47mである。カマド左袖に20~40cm程の礫が、右袖に直方体に加工された石が使用されていた。さらに煙道部には天井石に使用されていた扁平な礫が使用面の直上に残されていた。カマドからは土器が16点出土している。

貯蔵穴 竪穴建物南東隅に長軸0.78m、短軸0.54m、深さ0.20mの楕円形の貯蔵穴が検出された。貯蔵穴埋没土はやや砂質の黒褐色土が主体で炭化物が微量含まれていた。

貯蔵穴からの出土遺物はない。



0 1:60 2m

第13図 2号竪穴建物

壁際溝 南西部で幅9.4cm～16.1cm、深さ4.1cmの溝を確認した。

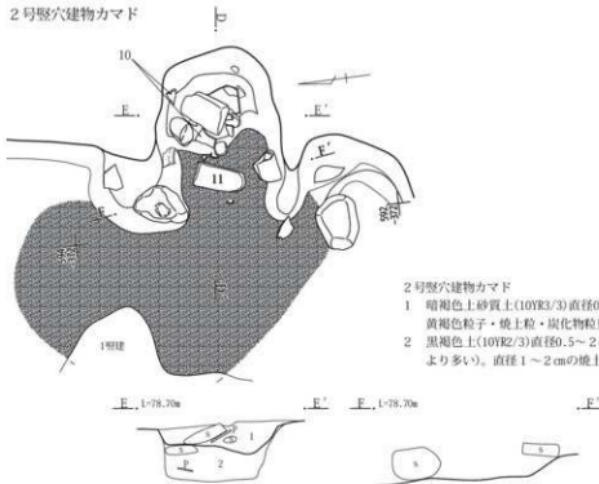
掘方 床面から最大で厚さ0.09mほど下位で掘方面を検出した。

遺物と出土状況 図示できた土器は土師器2点と須恵器8点である。須恵器は皿1点(第15図1)、杯2点(第15図2・3)、椀3点(第15図4～6)、甕胴部片2点(第15図9・

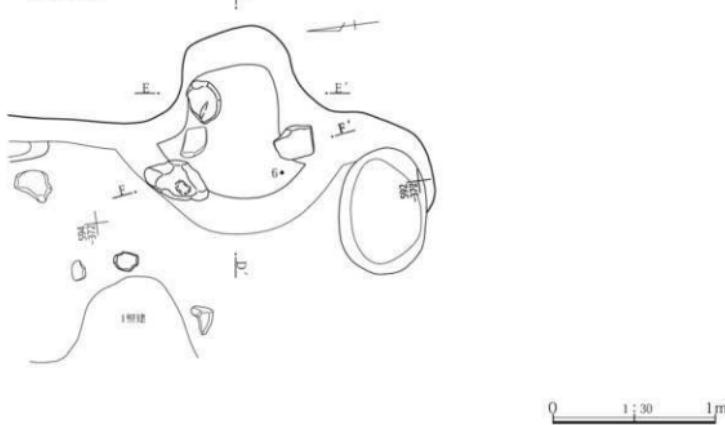
10)が出土した。土師器は甕口縁から胴部片2点(第15図7・8)が出土している。これらのうち床直上から出土したものは、2・3・5・10である。このほか、カマド天井石(PL.21-11)を写真のみ掲載した。

調査所見 須恵器皿(1)および椀(5)は酸化焰焼成であることや土師器甕(7・8)の形状から9世紀後半期の竪穴建物と考えられる。

2号竪穴建物カマド



カマド掘方

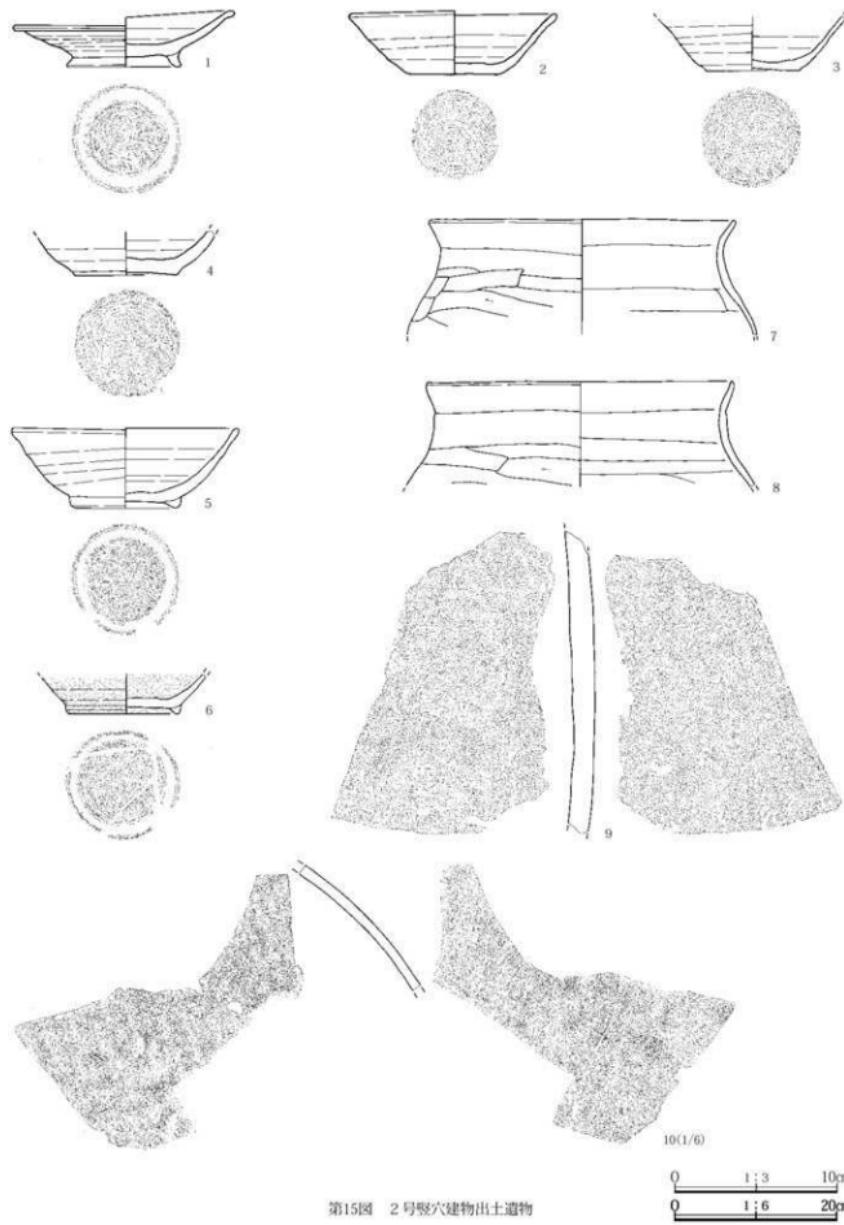


2号竪穴建物カマド

- 1 暗褐色土砂質土(10YR3/3)直径0.5～1cmの小砾を5%程度含む。黄褐色粒子・焼上粒・炭化物粒見られる。かたくしまる。
- 2 黒褐色土(10YR2/3)直径0.5～2cmの小砾を10%程度含む(上部により多い)。直径1～2cmの燒土粒を1%程度含む。

第14図 2号竪穴建物カマド

第2節 検出された遺構と遺物



第15図 2号竖穴建物出土遺物

3号竪穴建物(第16図 PL. 6・7・21 遺物観察表P.44)

位置 X=31,591・31,592 Y=-71,371～-71,373

重複 2号竪穴建物に先んずる。

平面形 南西隅は隅丸であるが、全容は不明。

規模 長軸2.22m以上 短軸0.85m以上

残存壁高 0.18m

床面積 1.06m²以上

主軸方位 N-115°-E

検出・埋没状況 2号竪穴建物を精査したところ、埋没土の輪郭を検出した。埋没土は細礫・ローム粒・炭化物を微量含む黒褐色土を主体とし、硬くしまっている。

柱穴 確認できなかった。

カマド 東壁に敷設されていた。残存状況は不良であり、規模は確認長0.36m、煙道部長・燃焼部長・煙道部

幅 計測不可、焚口幅0.45mであった。カマド袖は壊されていたが、構築材と考えられる礫を3点確認した。カマドからは土師器片が出土している。

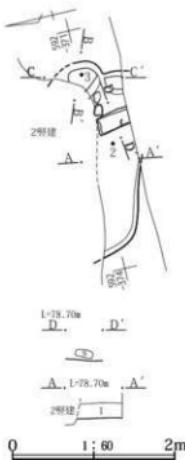
貯藏穴・壁際溝 確認できなかった。

掘方 確認できなかった。

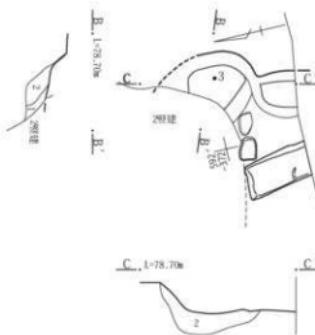
遺物と出土状況 図示できた土器は土師器2点と須恵器1点である。土師器台付腰台部～底部(第16図2)が床直上から、腰口縁～頸部片(第16図3)は、カマドの使用面から、須恵器腕口縁～体部片(第16図1)は埋土中から出土した。

調査所見 出土遺物は8世紀後半からの9世紀後半のものが含まれる。時期は、9世後半と考えられる。

3号竪穴建物



カマド

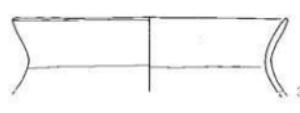
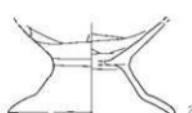
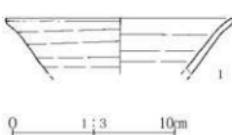


カマド掘方



3号竪穴建物

1 黒褐色土(10YR3/2)直径0.5～2cmの小礫を5%程度含む。ローム粒見られる。
直径1～2cmの炭化物を3%程度含む。かたくしまる。



第16図 3号竪穴建物と出土遺物

4号竪穴建物(第17図 PL. 7)

位置 X=31,591～31,592 Y=-71,372～-71,375

重複 1～3号竪穴建物と重複し、最も古い。

平面形 南西隅は隅丸であるが、全容は不明。

規模 長軸2.48m以上 短軸1.28m以上

残存壁高 0.13m

床面積 1.57m²以上

主軸方位 計測不可

検出・埋没状況 2・3号竪穴建物を精査したところ、埋没土の輪郭を検出した。埋没土は、かたくしまり炭化物を微量含む黒褐色土である。

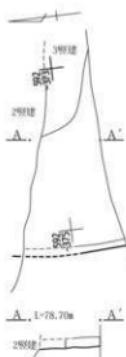
柱穴 確認できなかった。

カマド・貯蔵穴・壁際溝・掘方 確認できなかった。

遺物と出土状況 なし。

調査所見 発掘調査時には竪穴建物としたが、出土遺物がなく建物内の施設も検出されなかったことから、竪穴状遺構または土坑の可能性もある。遺構の検出状況および埋没土から古代の遺構であると考えられる。

4号竪穴建物



4号竪穴建物

1 黒褐色土(10YR2/2)直径1～2cmの小礫を3%程度、直径1mmの炭化物粒を1%程度含む。かたくしまる。



第17図 4号竪穴建物

(2) 竪穴状遺構

1号竪穴状遺構(第18図 PL. 7)

位置 X=31,591～31,592 Y=-71,371

重複 2・3号竪穴建物に先んずる。

平面形 不明

長軸方位 計測不可

規模 長軸0.85m以上 短軸0.49m以上 深さ0.18m

検出・埋没状況 埋土は、細礫・焼土・ローム粒を微量含む暗褐色土を主体とし、かたくしまる。

出土遺物 なし。

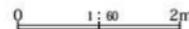
調査所見 発掘調査時には竪穴状遺構としたが、土坑の可能性もある。遺構の検出状況および埋土から、時期は古代と考えられる。

1号竪穴状遺構



1号竪穴状遺構

1 黒褐色土(10YR3/4)直径1～3cmの小礫を1%程度、直径1～2mmの焼土粒を3%程度、直径1mmのローム粒を1%程度含む。かたくしまる。



第18図 1号竪穴状遺構

(3) 土坑

1号土坑(第19図 PL. 7)

位置 X = 31,596 • 31,597 Y = -71,391 • -71,392

重複 なし。

平面形 不整形

長軸方位 N -71° - W

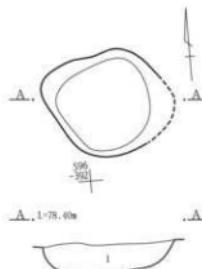
規模 長軸1.10m 短軸0.90m 深さ0.28m

検出・埋没状況 埋土は、小円礫を少量含む黒褐色土を主体としている。人為的な埋没と考えられる。断面形は不整形である。

出土遺物 なし。

調査所見 遺構の検出状況および埋土から、時期は古代と考えられる。

1号土坑



1号土坑

1 黒褐色土(10YR2/2)直径0.5~3cmの小円礫を20%程度含む。
※II層+III・IV層中の砂礫のような土。古代以降か。

2号土坑(第19図 PL. 8・21)

位置 X = 31,599 Y = -71,405

重複 なし。

平面形 南側は調査区外のため不明。

長軸方位 計測不可

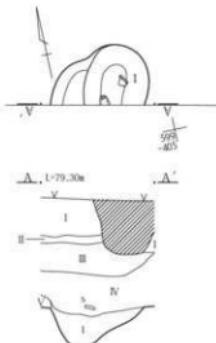
規模 長軸0.77m 短軸0.50m以上 深さ0.31m

検出・埋没状況 埋土は、砂礫を少量含む暗褐色土を主体とする。人為的な埋没と考えられる。断面形は不整形である。

出土遺物 埋土中から加曾利E3式の深鉢片(第19図1)が出土した。遺物は図示したもの以外にはない。

調査所見 遺物は埋土の上層からの出土であり、器面が著しく磨滅しているため、土坑内に流れ込んだ可能性が高い。よって遺構の検出状況および埋土から、時期は古代と考えられる。

2号土坑



2号土坑

1 暗褐色土(10YR3/2)砂礫を15%程度含む。※IV層に覆われている。
埋土中から縄文上層(加曾利E3式深鉢片)出土。

0 1:40 1m

2号土坑出土遺物



0 1:3 10cm

第19図 1号土坑、2号土坑と出土遺物

(4) ピット

1号ピット(第20図 PL. 8)

位置 X=31,599 Y=-71,390

重複 なし。

平面形 ほぼ椭円形

長軸方位 N-50°-W

規模 長軸0.35m 短軸0.34m 深さ0.14m

検出・埋没状況 埋土は、かたくしまった黒褐色粘質土主体である。人為的な埋没と考えられる。断面形は台形である。

出土遺物 なし。

調査所見 遺構の検出状況および埋土から、時期は古代と考えられる。

2号ピット(第20図 PL. 8)

位置 X=31,599・31,600 Y=-71,390・-71,391

重複 なし。

平面形 楕円形

長軸方位 N-90°

規模 長軸0.36m 短軸0.34m 深さ0.19m

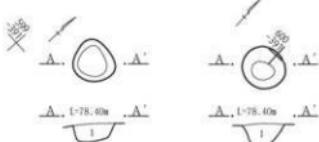
検出・埋没状況 埋土は、かたくしまった黒褐色粘質土主体である。人為的な埋没と考えられる。断面形はU字形である。

出土遺物 なし。

調査所見 遺構の検出状況および埋土から、時期は古代と考えられる。

1号ピット

2号ピット



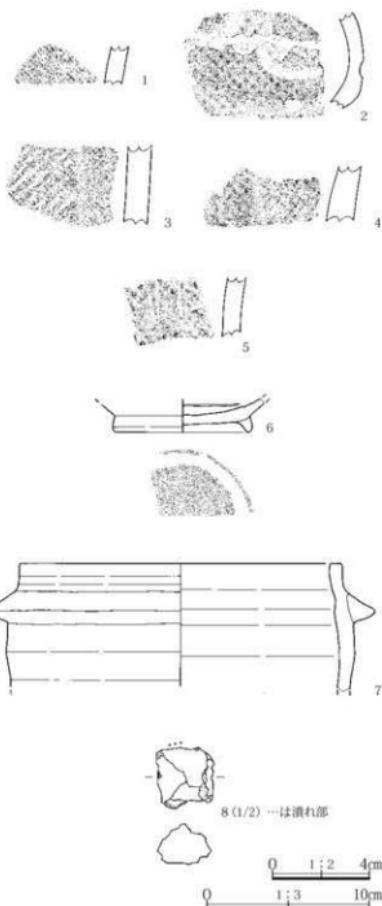
1号ピット・2号ピット

1 黒褐色粘質土(10YR3/2)黄褐色粒子・白色粒子見られる。かたくしまる。Ⅳ層に覆われている。搅拌されたV・VI層のようなイメージの上。

第20図 1号ピット、2号ピット

(5) 遺構外出土遺物(第21図 PL.21)

遺構外出土遺物は、加曾利E 3式縄文土器5点(第21図1～5)、灰釉陶器椀体部から底部片(第21図6)、須恵器羽釜口縁から胴部片(第21図7)、石英製火打石(第21図8)の8点を図示した。掲載した遺物のほかに土師器片270.6g、須恵器片108.3gが出土している。



第21図 遺構外出土遺物

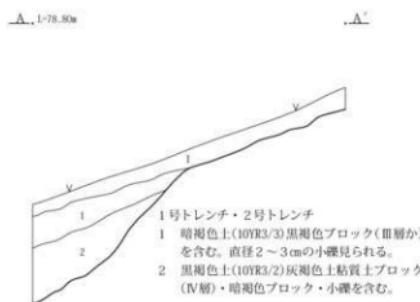
第4章 根小屋赤沼遺跡の遺構と遺物

第1節 調査の概要

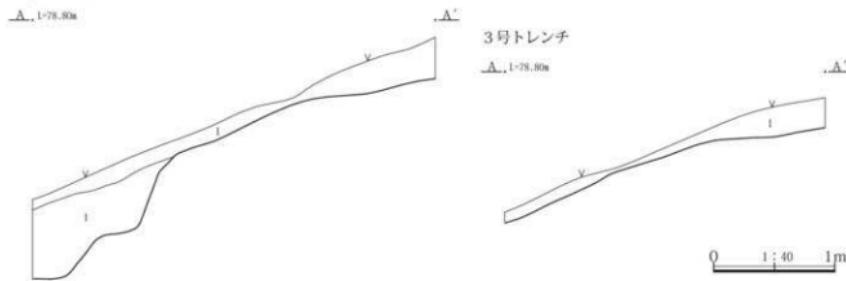
基本土層Ⅲ層下を遺構確認面として調査を実施した。調査区の現況は、北側および東側の標高がやや低くなる地形である。特に調査区の北西部は、水路建設のため大きく削平されていたため、トレレンチを5か所設定して遺構確認を実施した。1～3号トレレンチ(第22図)からは、遺構を検出することはできなかった。4・5号トレレンチ(第44図)からは、天明3年の浅間山噴火のときに降下したAs-Aを処理したと考えられる層位を確認した。

本遺跡で確認された遺構は、竪穴建物6棟、竪穴状遺構5基、土坑5基、ピット12基、溝2条、流路1条、As-A処理遺構1か所、烟1面である。

1号トレレンチ



2号トレレンチ



第22図 1号トレレンチから3号トレレンチ断面図

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 竪穴建物

1号竪穴建物(第24図 PL.10・22 遺物観察表P.44)

位置 X=31,630～31,633 Y=-71,509～-71,511

重複 なし。

平面形 圓丸長方形。

規模 長軸2.94m 短軸2.41m

残存壁高 0.18m

床面積 5.34m²

主軸方位 N-110°-E

検出・埋没状況 5号竪穴状遺構として調査を進めたが、遺物が豊富に出土したため、竪穴建物に名称を変更した。埋没土は細礫を少量含む黒褐色土を主体とする。

柱穴 床面で主柱穴1本が検出された。規模は下記の通りである。P2は貯蔵穴の可能性も考えられる。

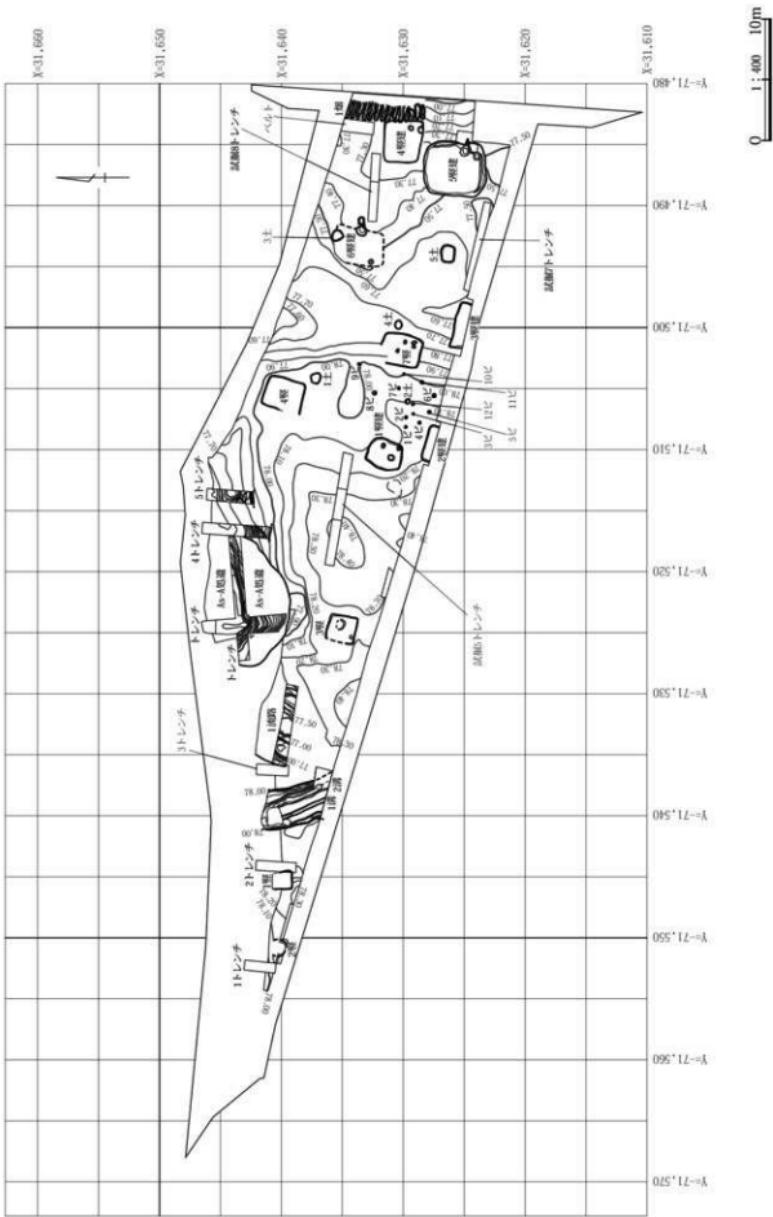
P1 長径0.43m 短径0.32m 深さ0.15m

P2 長径0.37m 短径0.35m 深さ0.16m

P1・P2の柱間の距離は1.32mである。

カマド 袖石に使用されていた四角柱状の礫が東壁の南寄りから出土したことから、この位置にカマドが敷設されていたと考えられる。遺存状態が悪く、焼土や灰、煙道は確認できなかった。

貯蔵穴 P2は貯蔵穴の可能性があり、規模は前述のとおりである。



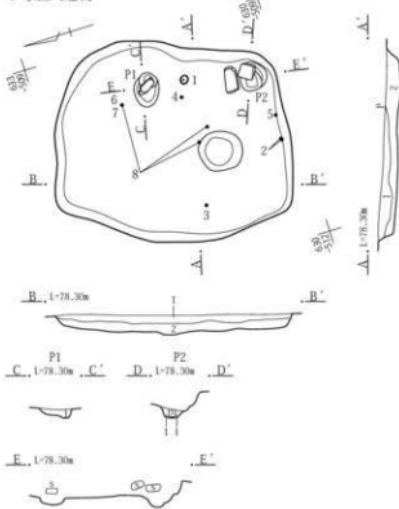
第23图 根小屋赤沼道路 道樹全体図

壁際溝・掘方 確認できなかった。

遺物と出土状況 図示できた遺物は須恵器杯2点、土師器杯2点、台付甕1点、甕3点である。このうち床直上から出土した土器は、須恵器杯体部から底部片(第24図3・4)と土師器杯(第24図1・2)、甕(第24図6～8)である。土師器杯(第24図1)は焼成後に底部が穿孔されていた。

調査所見 出土遺物から9世紀第3四半期の竪穴建物と考えられる。

1号竪穴建物



1号竪穴建物

- 1 暗褐色土(10YR3/3)褐色土粒を5%程度含む。直径1～2cmの小礫を5%程度含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/2)直径5cmの礫を5%程度含む。

1号竪穴建物1号ピット

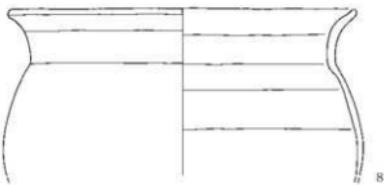
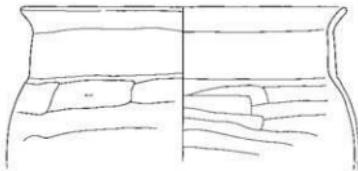
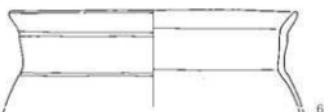
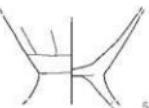
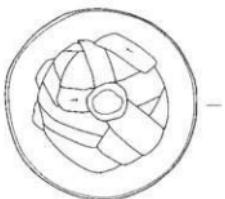
- 1 黑褐色土(10YR3/2)直径1～5cmの礫を5%程度含む。暗褐色土粒を3%程度含む。
- 2 黄褐色砂質土(10YE4/6)

1号竪穴建物2号ピット

- 1 黑褐色土(10YR3/2)直径1～5cmの礫を5%程度含む。暗褐色土粒を3%程度含む。
- 2 黄褐色砂質土(10YE4/6)

0 1:60 2m

第24図 1号竪穴建物と出土遺物



0 1:3 10cm

第2節 検出された遺構と遺物

2号竪穴建物(第25図 PL.11)

位置 X=31,627・31,628 Y=-71,508~-71,511

重複 なし。

平面形 圓丸長方形か。

規模 長軸3.02m 短軸0.78m以上

残存壁高 0.19m

床面積 1.92m²以上

主軸方位 N-74°-W

検出・埋没状況 6号竪穴状遺構として調査を進めたところ、掘削方向が他の3棟の竪穴建物と同一であり、埋没土も酷似していることから、竪穴建物として扱った。埋没土は、炭化物粒を微量含む黒褐色土を主体とし、上層には暗褐色の砂質土を含んでいる。

柱穴・カマド・貯蔵穴 検出されなかった。

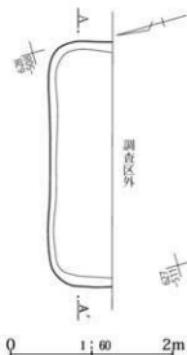
壁際溝 床面では確認できなかったが、掘方で北壁と西壁際で溝を検出した。最大深度2cmである。

掘方 床面から2cmほど下位で掘方面を検出した。北東隅が最も深く掘り込まれている。貼床は細礫を微量含む黒褐色土が主体である。

遺物と出土状況 実測・図示できた遺物はない。

調査所見 遺構の検出状況および埋没土から古代の竪穴建物と考えられる。

2号竪穴建物



2号竪穴建物

1 暗褐色土(10YR3/3)や砂質。

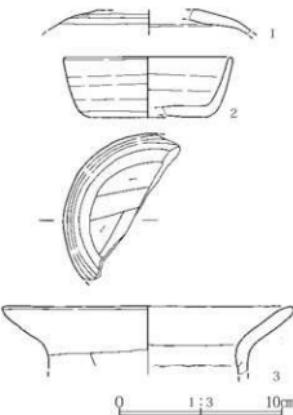
2 黒褐色土(10YR3/2)炭化物粒・明褐色土粒を3%程度含む。

3 黑褐色土(10YR3/2)直径0.5~1cmの小礫を5%程度含む。黄褐色粒子見られる。(掘方)

掘方



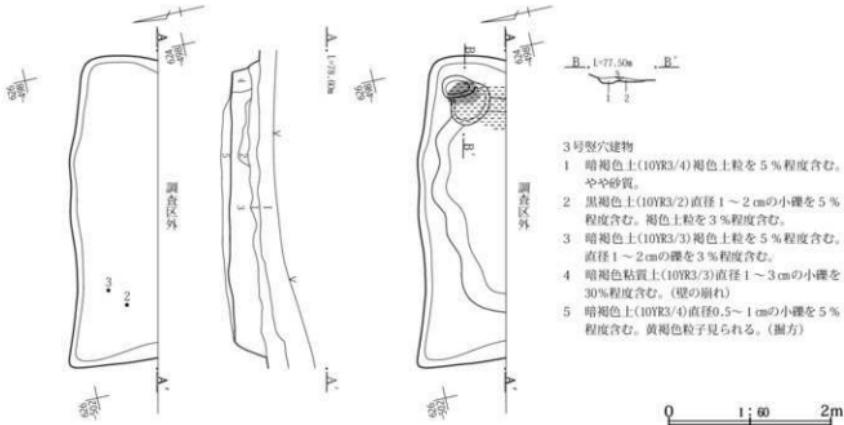
3号竪穴建物出土遺物



第25図 2号竪穴建物、3号竪穴建物出土遺物

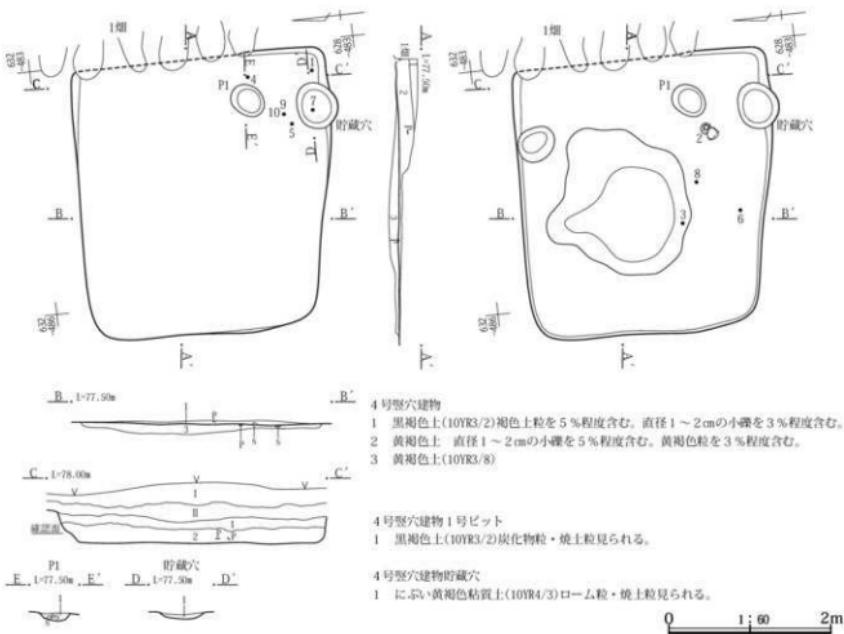
3号竪穴建物

掘方



4号竪穴建物

掘方



第26図 3号竪穴建物、4号竪穴建物

第2節 検出された遺構と遺物

4号竪穴建物(第26・27図 PL.11・12・22 遺物観察表P.45)

位置 X=31,628~31,631 Y=-71,483~-71,486

重複 1号烟に先んずる。

平面形 圓丸台形。

規模 長軸3.40m 短軸3.03m

残存壁高 0.33m

床面積 9.87m²

主軸方位 N-85°-W

検出・埋没状況 10号竪穴状遺構として調査を進めたが、須恵器楕等の遺物が多く出土したため、竪穴建物として扱った。埋没土は細繙を微量含む黄褐色土である。

柱穴 挖方で柱穴1本を検出した。規模は下記の通りである。

P1 長径0.45m 短径0.36m 深さ0.11m

カマド 東壁は1号烟により壊されていたため、確認できなかった。

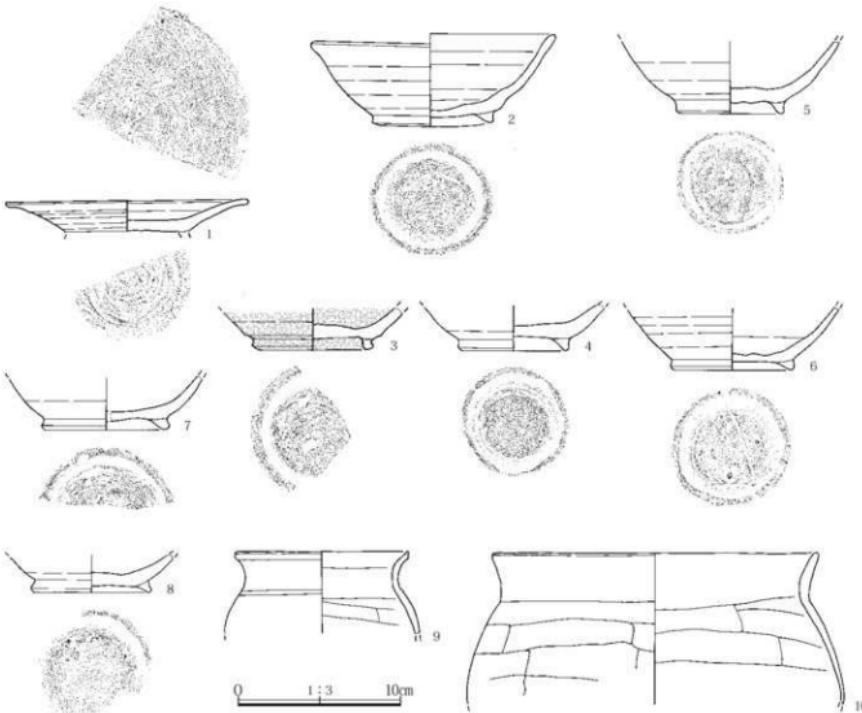
貯藏穴 挖方で南東隅に長軸0.45m、短軸0.36m、深さ0.11mの楕円形の貯藏穴を確認した。埋没土はローム粒・焼土粒を含むにぶい黄褐色粘質土である。

壁際溝 確認できなかった。

掘方 床面から厚さ0.05m~0.12mほどの貼床を検出した。中央部が最も深く掘り込まれ、周囲はほとんど床面と同じ高さである。細繙を微量含む黄褐色土を主体としている。

遺物と出土状況 図示できた遺物は、須恵器8点、土師器2点である。うち7点は楕(第27図2~8)である。須恵器皿(第27図1)には内外面に線刻が施されていた。そのほか、土師器小型甕口縁~胴部片(第27図9)、甕(第27図10)が出土している。このうち、須恵器楕(4)・(7)は床直上3cm、(8)は4cmからの出土である。

調査所見 出土遺物から9世紀第4四半期の竪穴建物と考えられる。



第27図 4号竪穴建物出土遺物

5号竪穴建物(第28~31図 PL.13・23・24 遺物類表p.45・46)

位置 X=31,623~31,628 Y=-71,484~-71,489

重複 なし。

平面形 圓丸長方形。

規模 長軸5.06m 短軸4.40m

残存壁高 0.29m

床面積 15.3m²

主軸方位 N-102°-E

検出・埋没状況 11号竪穴状遺構として調査を進めたが、カマドを検出したため竪穴建物として扱った。埋没土は細礫を微量含む黒褐色土を主体とし、炭化物粒が混入する。

柱穴 確認できなかった。

カマド 東壁に敷設されていた。残存するカマドの規模は確認長0.94m以上、煙道部・燃焼部長は計測不可、焚口幅0.69mである。カマドは完全に壊されていたため、正確な規模や構築状況についてはわからなかった。カマ

ド周辺からは、板状に加工された未固結凝灰岩やV字状の窪みがある安山岩凝灰岩が出土しているが、これはカマド構築材として使用された可能性がある。

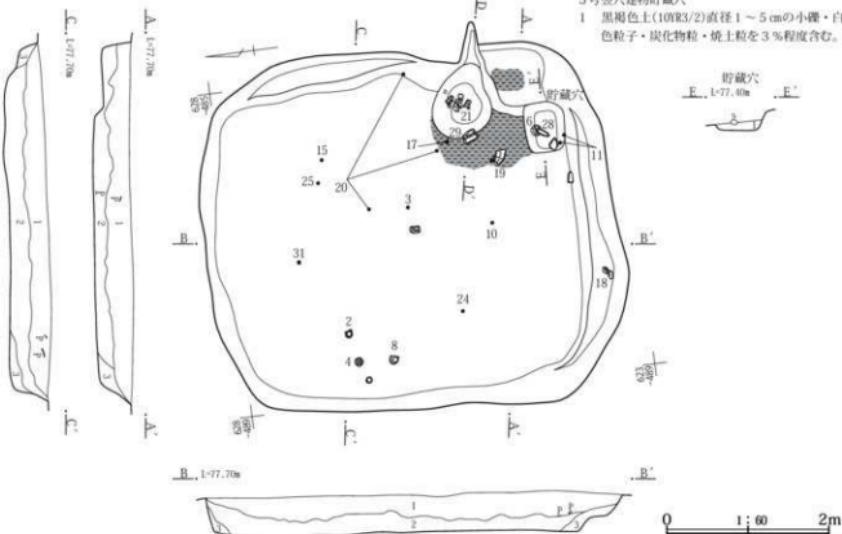
貯藏穴 積み重ね物南東頭陣に長軸0.63m、短軸0.50m、深さ0.14mの長方形を呈する貯藏穴が検出された。貯藏穴埋没土は細礫や炭化物粒・焼土粒を微量含む黒褐色土である。貯藏穴からは黒色土器や敲石(PL.24-28)が出土している。

壁際溝 確認できなかった。

掘方 貼床は施されておらず、掘方を直接床面としている。

遺物と出土状況 図示できた土器は土師器、須恵器、石製品等29点である。黒色土器鉢の体部下位から底部片(第29図1)、須恵器皿(第29図2~4)3点、須恵器蓋摘みから天井部片(第29図5)1点、須恵器杯(第29図6・8・第30図9)3点、須恵器椀(第29図7、第30図10~15)7点、灰釉陶器長頸壺の口縁部下位から頸部片(第30図16)1点、須恵器長頸壺と思われる胴部片(第30図17)、須恵

5号竪穴建物



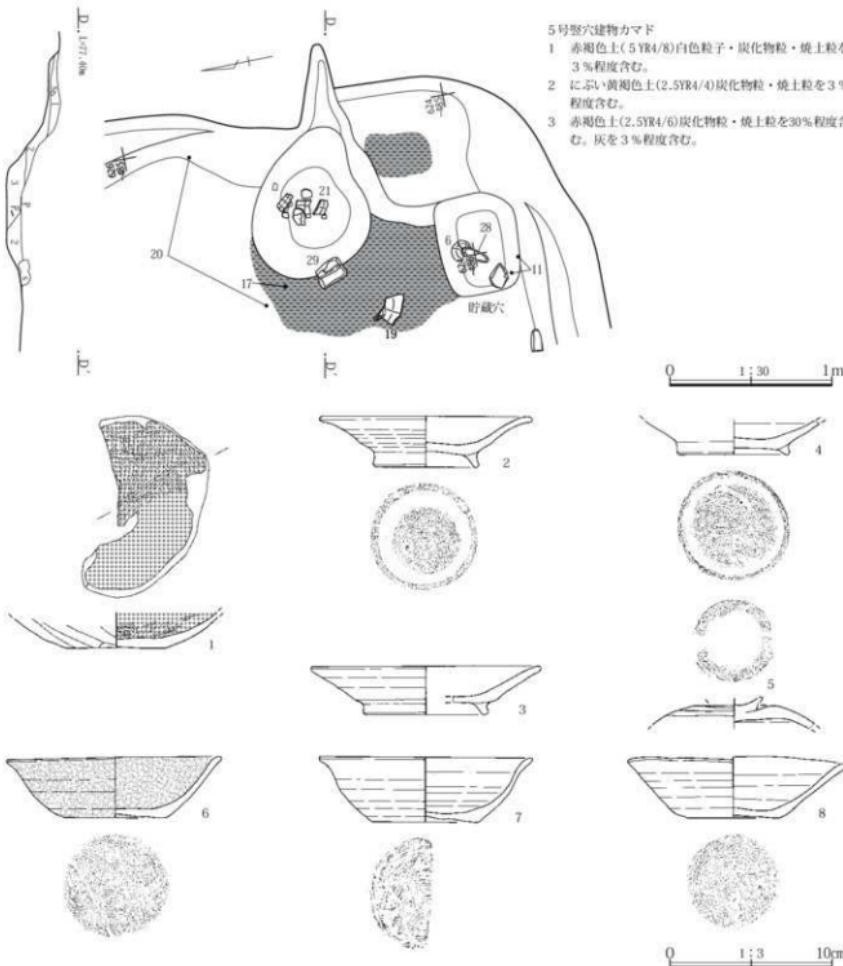
第28図 5号竪穴建物

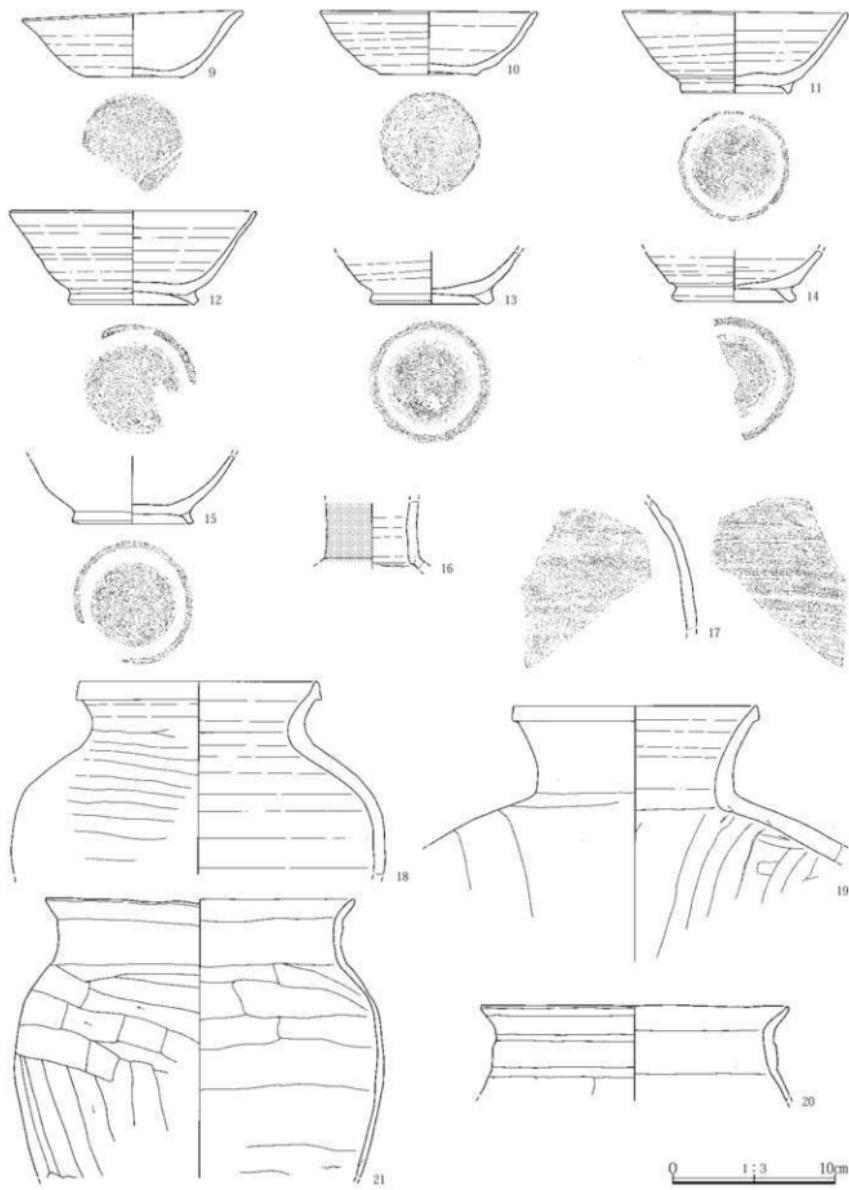
器壺(第30図18、第31図23)2点、須恵器横瓶口縁から胴部(第30図19)1点、土師器甕(第30図20・21、第31図22・26)4点が出土した。そのほか、土鍾(第31図24・25)2点、敲石(第31図27)1点、V字状の窪みを有する石製品(第31図29)、鉄製雁又鏃(第31図31)が出土している。

この他、図示した以外にカマド天井石と思われる未固結凝灰岩(PL.24-30)が出土している。

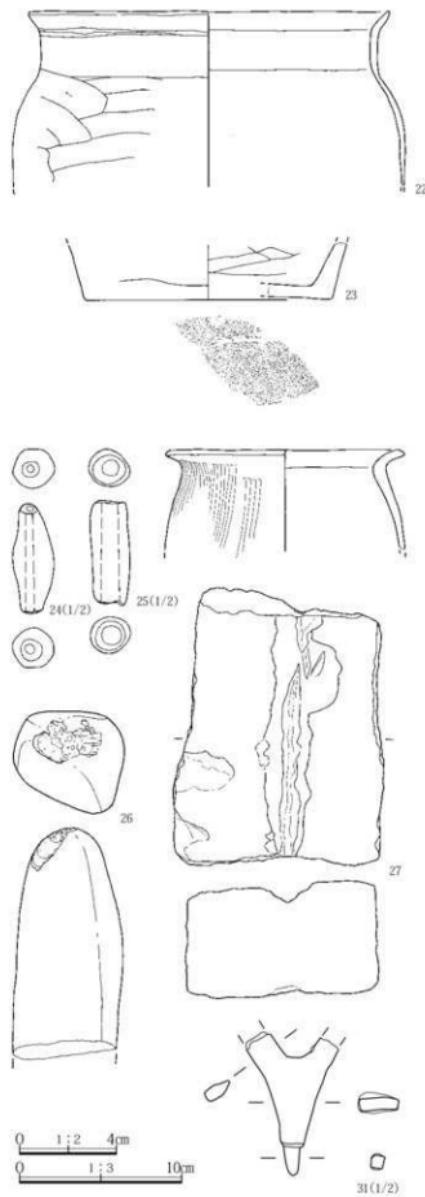
調査所見 土師器甕(20~22)は口縁部がコの字状を呈しており、9世紀第3四半期の竪穴建物と考えられる。須恵器皿、杯、椀も共伴に問題はない。なお、土師器甕(26)は古墳時代前期の混入品であろう。

カマド





第30図 5号竖穴建物出土遺物(2)



第31図 5号竖穴建物出土遺物(3)

6号竖穴建物(第32図 PL.14・24 遺物観察表P.46)

位置 X=31,631～31,635 Y=-71,490～-71,494

重複 なし。

平面形 圓丸長方形。

規模 長軸4.10m以上 短軸2.88m以上

残存壁高 0.11m

床面積 11.22m²

主軸方位 N-88°-E

検出・埋没状況 9号竖穴状遺構、6号土坑、7号土坑として調査を進めたが、須恵器椀・羽釜が出土し遺物が多く出土したため、竖穴建物として扱った。床面はほとんど削平されているため、建物の輪郭がわずかに残されていた。埋没土の暗褐色土を一部で確認できた。

柱穴 確認できなかった。

カマド 西壁に敷設されていた。遺存状態が悪く、焼土や灰、煙道は確認できなかった。遺物は須恵器椀と羽釜が出土している。

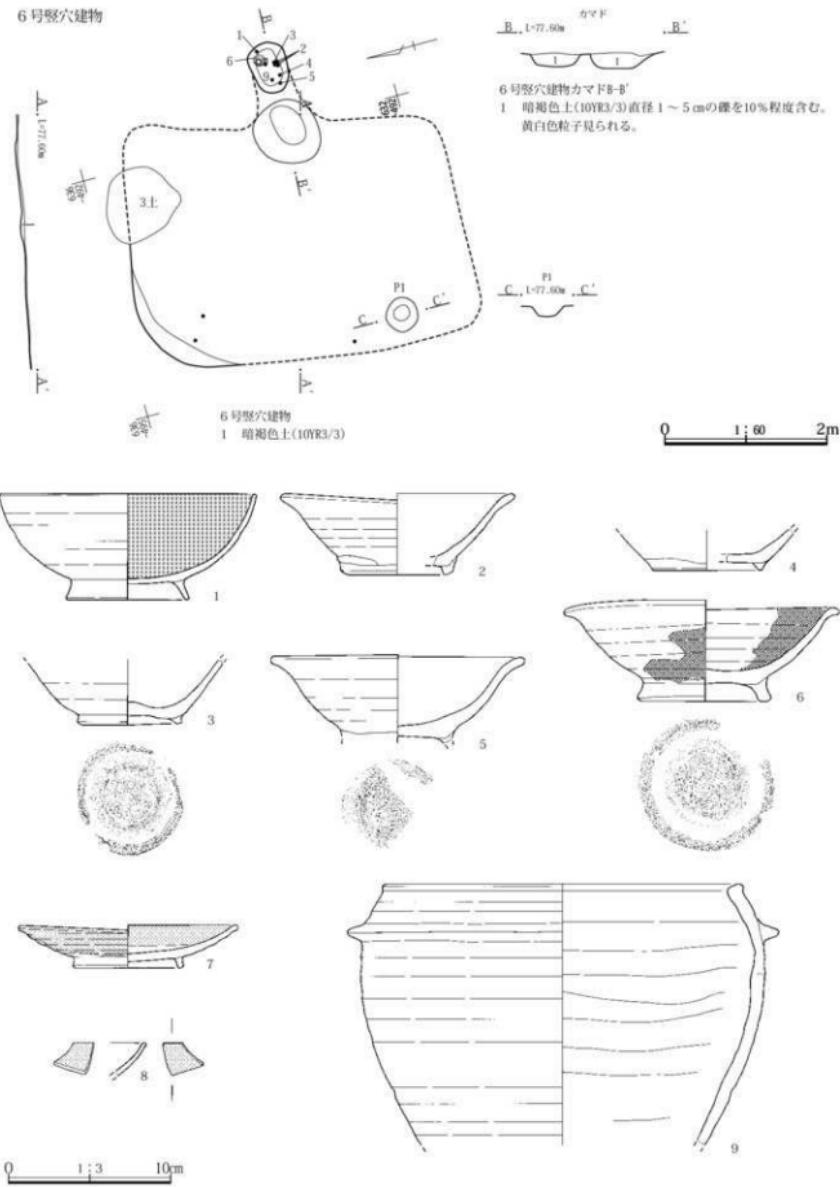
貯蔵穴・壁際溝 確認できなかった。

掘方 埋没土がほとんど残っていないため確認できなかった。

遺物と出土状況 図示できた遺物は黒色土器1点、須恵器6点、灰釉陶器2点である。黒色土器椀(第32図1)1点、須恵器椀(第32図2～6)5点、灰釉陶器皿(第32図7)1点、灰釉陶器椀(第32図8)1点、羽釜口縁～胴部下位片(第32図9)が出土している。これらの遺物は、カマドからまとめて出土した。

調査所見 出土遺物から9世紀第4四半期の竖穴建物と考えられる。

6号竪穴建物



第32図 6号竪穴建物と出土遺物

(2) 堅穴状遺構

1号堅穴状遺構(第33図 PL.14・25 遺物観察表P.46)

位置 X=31,639・31,640 Y=-71,554~-71,546

重複 なし。

平面形 圓丸長方形か。

規模 長軸1.66m以上 短軸1.45m

残存壁高 0.21m

面積 2.1m²以上

長軸方位 N-6°-W

検出・埋没状況 調査区の西端の斜面にかかるところに位置する。埋没土は細礫を少量含み褐色土を主体とし、やや粘質である。

遺物と出土状況 図示できた遺物は須恵器3点で、埋土中から杯口縁~底部片(第33図1)1点、杯胴部~底部片(第33図3)1点と楕口縁~底部片(第33図2)1点が出土した。

調査所見 遺構の検出状況および出土遺物から、時期は8世紀後半期と考えられる。

2号堅穴状遺構(第34図 PL.14・25 遺物観察表P.46)

位置 X=31,639・31,640 Y=-71,550・-71,551

重複 なし。

平面形 円形か。

規模 長軸1.41m 以上 短軸 計測不可

残存壁高 0.13m

面積 計測不可

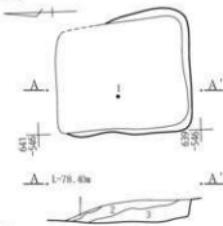
長軸方位 N-77°-W

検出・埋没状況 調査区西端の斜面に位置し、北側は削平されていた。埋没土は細礫を微量含む暗褐色土を主体とし、細礫を微量含む暗褐色土に覆われている。

遺物と出土状況 図示できた遺物は須恵器3点で、内訳は皿(第34図1)、杯口縁~底部片(第34図2)、楕(第34図3)である。上記の遺物は、床直上から出土している。

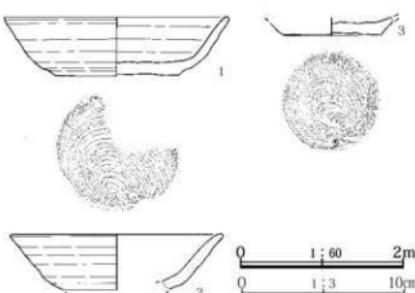
調査所見 出土遺物から9世紀後半期と考えられる。

1号堅穴状遺構



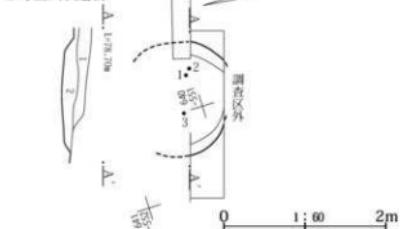
1号堅穴状遺構

- 1 黒褐色土(10YR3/2)斜面の堆積(基本土層のⅡ相当)。
2 暗褐色土(10YR3/4)礫を30%程度含む。
3 褐色土(10YR4/6)直径1~2cmの小礫を5%程度含む。やや粘質。



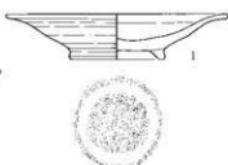
第33図 1号堅穴状遺構と出土遺物

2号堅穴状遺構



2号堅穴状遺構

- 1 暗褐色土(10YR3/3)直径0.5~1cmの小礫を5%程度含む。やや砂質。
2 暗褐色土(10YR3/4) 直径0.5~1cmの小礫を5%程度含む。黄褐色
粒子見られる。



第34図 2号堅穴状遺構と出土遺物



3号竪穴状遺構(第35図 PL.14 遺物観察表P.46)

位置 X=31,633～31,636 Y=-71,523～-71,525

重複 なし。西壁は擾乱により一部壊されている。

平面形 圓丸方形。

規模 長軸2.34m 短軸2.21m 残存壁高0.03m

面積 4.46m²

長軸方位 N-15°-E

検出・埋没状況 上層はほとんど削平されていたため、埋没土は暗褐色土が部分的に残っていた。

遺物と出土状況 図示できた遺物は、須恵器甕胴部片(第34図1)のみである。図示した甕のほかには遺物は出土していない。

調査所見 出土遺物から古代と考えられる。

4号竪穴状遺構(第36図 PL.15 遺物観察表P.46・47)

位置 X=31,638～31,641 Y=-71,503～-71,507

重複 なし。西壁の南半分は、擾乱により壊されていた。

平面形 圓丸長方形と推定される。

規模 長軸3.19m 短軸2.15m

残存壁高 0.03m

面積 7.67m²

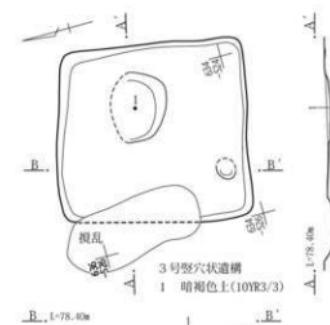
長軸方位 N-17°-E

検出・埋没状況 上層はほとんど削平されていたため、埋没土は暗褐色土が部分的に残っていた。

遺物と出土状況 図示できた遺物は須恵器3点で、内訳は杯体部～底部片(第36図2)1点、蓋口縁部片(第36図1)1点、甕胴部～底部片(第36図3)1点である。

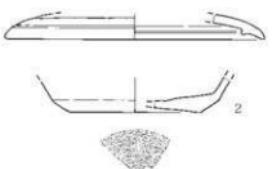
調査所見 出土遺物から8世紀第1四半期と考えられる。

3号竪穴状遺構



第35図 3号竪穴状遺構と出土遺物

4号竪穴状遺構



第36図 4号竪穴状遺構と出土遺物

7号竪穴状遺構(第37図 PL.15+25 遺物観察表P.47)

位置 X=31,628～31,631 Y=-71,500～-71,503

重複 なし。北西隅は擾乱により壊されている。

平面形 圓丸長方形と推定される。

規模 長軸3.38m 短軸2.64m

残存壁高 0.03m

面積 7.60m²以上

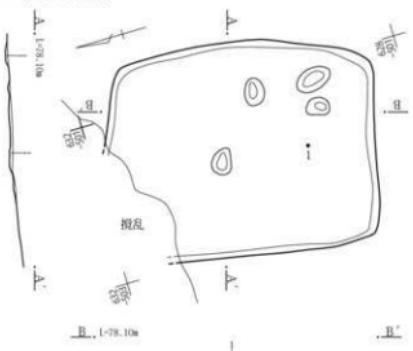
主軸方位 N-12°-E

検出・埋没状況 上層はほとんど削平されていたため、埋没土は褐色土粒・橙色粒を微量含む暗褐色土が部分的に残っていた。

遺物と出土状況 図示できた遺物は須恵器壺胴部片(第37図1)1点で、穿孔されていた。

調査所見 出土遺物から古代と考えられる。

7号竪穴状遺構



7号竪穴状遺構

1 單褐色土(10YR3/3)褐色土粒を5%程度含む。橙色粒子を3%程度含む。

0 1:60 2m



第37図 7号竪穴状遺構と出土遺物

(3)土坑

1号土坑(第38図 PL.15)

位置 X=31,636～31,637 Y=-71,503～-71,504

重複 なし。

平面形 不整形

長軸方位 N-56°-W

規模 長軸0.93m 短軸0.82m 深さ0.06m

検出・埋没状況 埋土は、炭化物粒を微量含む暗褐色土を主体とし褐色土が混入する。断面形は台形を呈する。

出土遺物 埋土中から土師器片が出土したが、小片のため図示するには至らなかった。

調査所見 遺構の検出状況および出土遺物から古代の遺構であると考えられる。

1号土坑



1号土坑

1 單褐色土(10YR3/4)褐色土を5%程度含む。黄褐色粒・炭化物粒見られる。

0 1:40 1m

第38図 1号土坑

2号土坑(第39図 PL.15)

位置 X=31,629 Y=-71,505～-71,506

重複 なし。

平面形 楕円形

長軸方位 N-64°-W

規模 長軸0.45m 短軸0.37m 深さ0.20m

検出・埋没状況 埋土は、細礫を少量含む暗褐色砂質土を主体とし、しまりがある。人為的な埋没と考えられる。断面形は台形を呈する。

出土遺物 埋土中から須恵器壺胴部片(第39図1)が出土した。

調査所見 遺構の検出状況および出土遺物から、時期は古代と考えられる。

第4章 根小屋赤沼遺跡の遺構と遺物

3号土坑(第39図 PL.15)

位置 X = 31,634 • 31,635 Y = -71,492

重複 6号竪穴建物に先んずる。

平面形 不整形

長軸方位 N - 63° - W

規模 長軸0.97m 短軸0.85m 深さ0.16m

検出・埋没状況 埋土は、細礫とローム粒を微量含む暗褐色土を主体とする。人為的な埋没と考えられる。断面形は台形を呈する。

出土遺物 なし。

調査所見 発掘調査では中・近世のイモ穴の可能性があるとしている。よって時期は中・近世と考えられる。

4号土坑(第39図 PL.16)

位置 X = 31,630 Y = -71,499 • -71,500

重複 なし。

平面形 楕円形

長軸方位 N - 77° - W

規模 長軸0.73m 短軸0.58m 深さ0.08m

検出・埋没状況 埋土は、黄褐色土粒を微量含む暗褐色土を主体とする。人為的な埋没と考えられる。断面形は台形である。

出土遺物 なし。

調査所見 遺構の検出状況および埋土から、時期は古代と考えられる。

5号土坑(第39図 PL.16)

位置 X = 31,625 • 31,626 Y = -71,493 • -71,494

重複 なし。

平面形 隅丸長方形

長軸方位 N - 87° - W

規模 長軸1.43m 短軸1.17m 深さ0.21m

検出・埋没状況 埋土は、細礫を含みやや粘質の黒褐色土を主体とし、礫を微量含む褐色土が混入する。自然埋没と考えられる。断面形は台形を呈する。

出土遺物 なし。

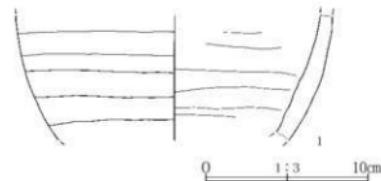
調査所見 遺構の検出状況および埋土から、時期は古代と考えられる。

2号土坑



2号土坑

1 暗褐色砂質土(10YR3/3)直径0.5~2cmの小礫を10%程度含む。黄褐色粒子・赤色粒子を1%程度含む。しまりあり。



3号土坑



4号土坑



3号土坑

1 暗褐色土(10YR3/4)直径0.5~1cmの小礫を5%程度含む。ローム粒を2%程度含む。

4号土坑

1 暗褐色土(10YR3/3)黄褐色土を2%程度含む。

5号土坑



5号土坑

1 黒褐色土(10YR3/6) 直径1~2cmの小礫・褐色土粒を5%程度含む。
2 黒褐色土(10YR2/2) 小礫見られる。やや粘質。



第39図 2号土坑から5号土坑と出土遺物

(4) ピット(第40・41図 PL.16~19 第2表)

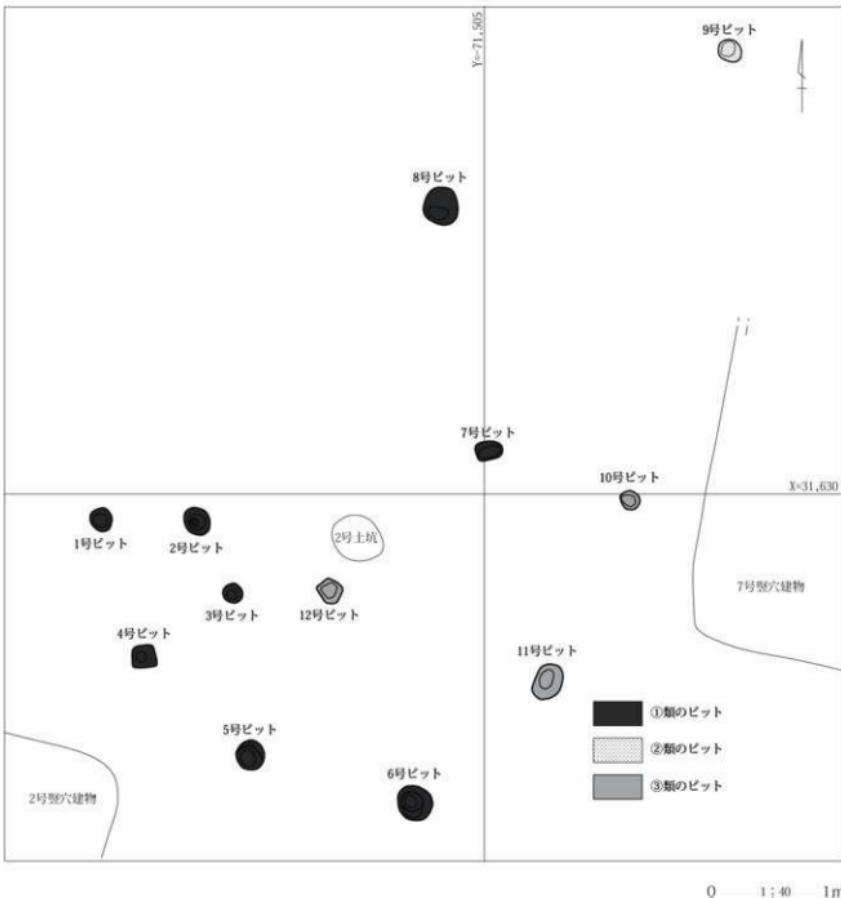
本遺跡で調査したピットは12基である。埋没土は、①類：ローム粒を含む黒褐色砂質土、②類：炭化物粒・白色粒を含む暗褐色砂質土、③類：ローム粒・細礫を含む黒褐色砂質土に分類することができる。①に属するピットは1~8号ピット、②は9号ピット、③は10~12号ピットである。

このうち、1号・4号ピットの間隔は1.17m、4号・

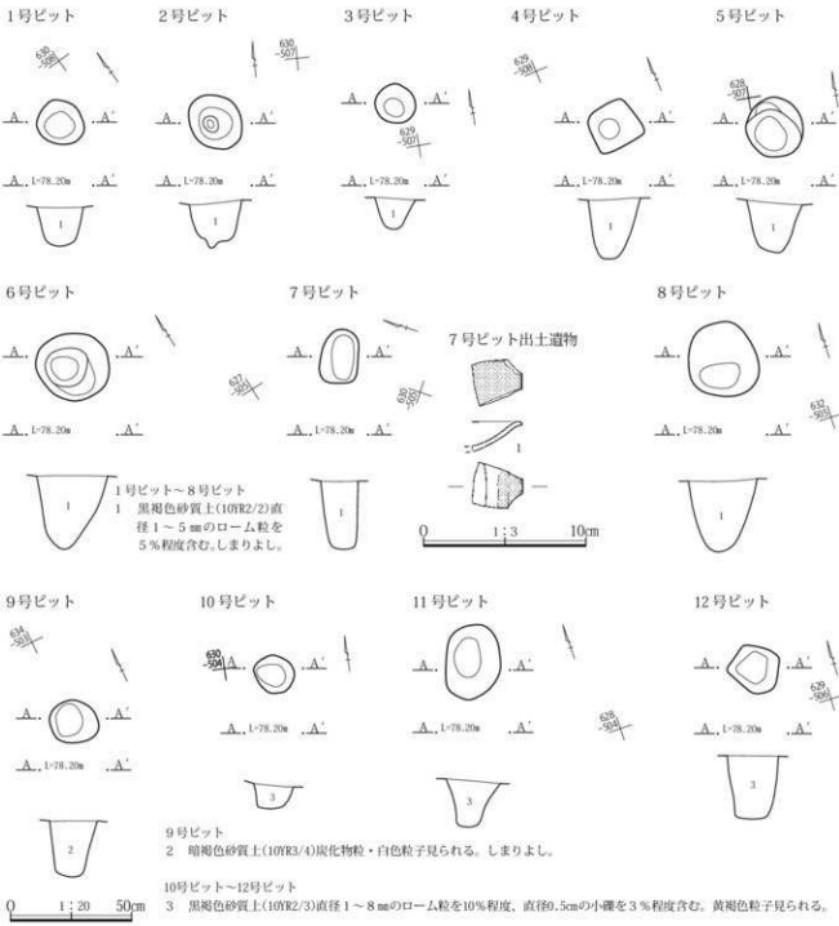
5号ピット間は1.20m、5号・6号ピット間は1.38mでほぼ等間隔であった。

遺物は7号ピットの埋土中より灰陶器皿と考えられる口縁部片(第41図1)が出土している。遺構の時期は、埋没土や遺構の検出状況および遺物から、古代であると考えられる。

各ピットの規模については第2表のとおりである。



第40図 埋没土分類によるピット位置図



第41図 1号ピットから12号ピットと出土遺物

第2表 根小屋赤沼遺跡ピット計測表

No.	X座標	Y座標	主軸方位	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	埋没土/埋没土分類	断面形状
1	31,629	-71,508	N-15°-W	20	18	15	楕円形	暗褐色砂質土①	U字形
2	31,629	-71,507	N-39°-W	25	21	20	楕円形	暗褐色砂質土②	不整形
3	31,629	-71,506・-71,507	N-36°-W	17	16	13	円形	暗褐色砂質土③	U字形
4	31,628	-71,507	N-55°-W	24	23	25	菱形	暗褐色砂質土④	U字形
5	31,627	-71,506・-71,507	N-46°-W	24	24	25	円形	暗褐色砂質土⑤	台形
6	31,627	-71,505	N-34°-W	31	28	32	楕円形	暗褐色砂質土⑥	U字形
7	31,630	-71,504・-71,505	N-76°-E	23	15	28	楕円長方形	暗褐色砂質土⑦	U字形
8	31,632	-71,505	N-25°-E	31	29	38	楕円形	暗褐色砂質土⑧	U字形
9	31,633	-71,502・-71,503	N-44°-W	21	18	23	楕円形	暗褐色砂質土⑨	台形
10	31,629・31,630	-71,503	N-53°-W	17	15	11	楕円形	暗褐色砂質土⑩	台形
11	31,628	-71,504	N-15°-E	30	23	20	楕円形	暗褐色砂質土⑪	台形
12	31,629	-71,506	N-15°-W	22	20	26	不整形	暗褐色砂質土⑫	台形

(5)溝

1号溝(第42図 PL.19・25)

位置 X=31,636~31,641 Y=-71,537~-71,541

重複 2号溝に後出する。

形状 ほぼ直線の溝で、北側は後世の土地改変によって削平されている。底面には凹凸があるが、比高差はほぼない。

走向方位 N-20°-W(南南東から北北西)

規模 全長5.54m以上 最大幅1.93m 最深部0.63m

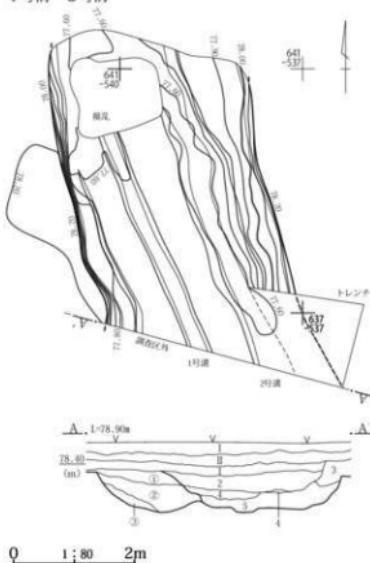
検出・埋没状況 埋土は、中礫を多量に含む暗褐色土が主体で、山崩れまたは土石流等で埋没したと考えられる。

断面形は台形状で、中央や東寄りが窪んでいる。

出土遺物 埋土中から須恵器腕口縁~底部片(第42図1)と腕部下位~底部片(第42図2)が出土した。

調査所見 遺跡地付近には柳沢があり、たびたび土石流が発生していた。振り返しが行われたと推測されるが、その後も一気に埋没したことがうかがえる。遺物および遺構の検出状況から、時期は古代と考えられる。

1号溝・2号溝



(6) 流路

1号流路(第43図 PL.19・25)

位置 X=31,638~31,640 Y=-71,529~-71,535
調査区西側の斜面付近で確認した。

重複 なし。

形状 レンチ調査のため、全容を明らかにすることはできなかったが、底面は平坦である。

走向方位 N-29°-W(南西から北東か)

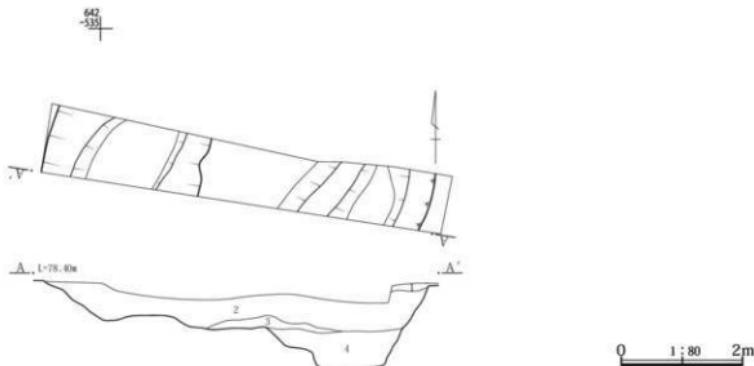
規模 全長1.04m以上 最大幅6.45m 最深部1.49m

検出・埋没状況 埋土は、白色粒を含む暗褐色土で、最深部の断面形は台形である。

出土遺物 埋土中から円筒埴輪片1点(第43図1)が出土している。周囲からの流れ込みと考えられる。

調査所見 遺構の検出状況および埋土から、古代と考えられる。

1号流路



1号流路

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2)直徑1~10cmの礫を30%程度含む。直徑1~3cmの小礫を3%程度含む。
- 2 褐色土(10Y4/4)直徑1~5cmの礫・暗褐色土粒を5%程度含む。
- 3 暗褐色粘質土(10YR3/3)直徑1~3cmの小礫を30%程度含む。
- 4 暗褐色土(10YR3/3)直徑1~3cmの小礫を30%程度含む。基本上層V層が主体。



第43図 1号流路と出土遺物

(7) As-A処理遺構

As-A処理遺構(第44図 PL.20・25)

位置 X=31,639~31,646 Y=-71,517~-71,513

重複 なし。

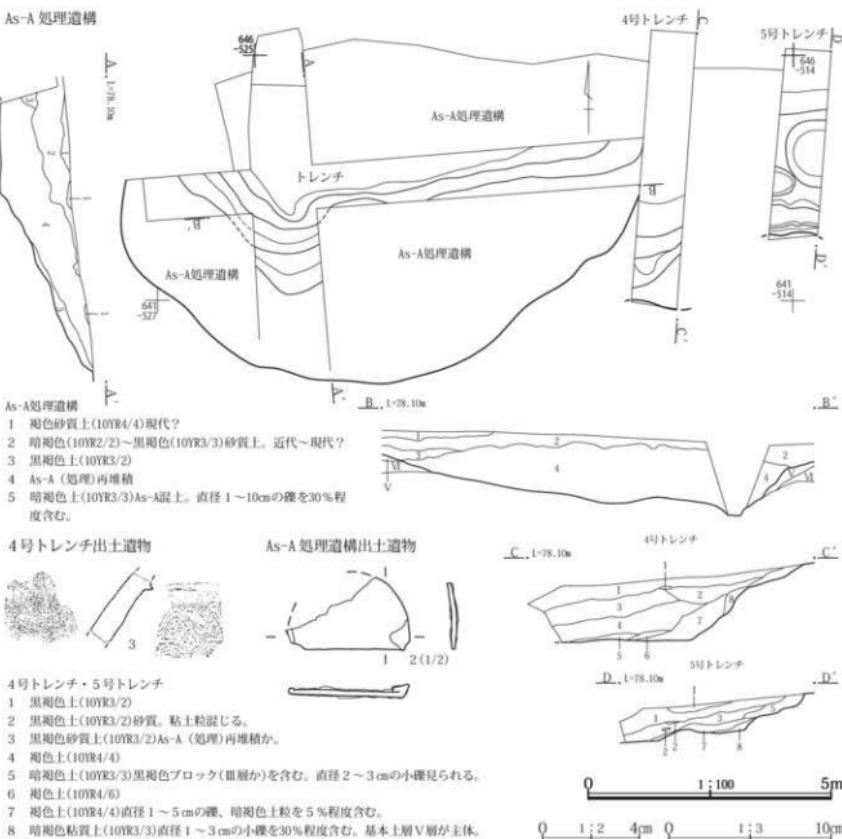
平面形 不整形

長軸方位 N-66°-E

規模 東西長14.35m以上 短軸6.99m以上 As-A層最厚1.21m

検出・埋没状況 3層・4層・5層は、天明3(1783)年の浅間山の噴火時に堆積したAs-Aをかき集めて処理した

As-A処理遺構



第44図 As-A処理遺構と出土遺物、4号トレンチ・5号トレンチと出土遺物

ものである。上層には近世以降の耕作土を確認した。

出土遺物 墓地から敲石(PL.25-1)と不明鉄製品(第44図2)が出土した。4号トレンチからは、須恵器甕口縁部片(第44図3)が出土した。そのほか、陶器片17点が出土したが小片のため実測・図示することはできなかった。

調査所見 As-Aを処理した層位は4・5号トレンチからも確認されている。よって、遺構は5号トレンチよりさらに東に拡張しているであろう。出土遺物および埋土から、時期は天明3(1783)年以前と考えられる。

(8) 烟

1号烟(第45図 PL.20)

位置 X=31,628~31,634 Y=-71,481~-71,483

重複 4号竪穴建物に後出する。東側は擾乱により壊されている。

規模 東西1.57m以上 南北6.24m以上

サク 条数 14条 条間 42~50cm 掘削間隔 9~18cm

長さ 計測不可 幅 22~48cm 深さ 7~10cm

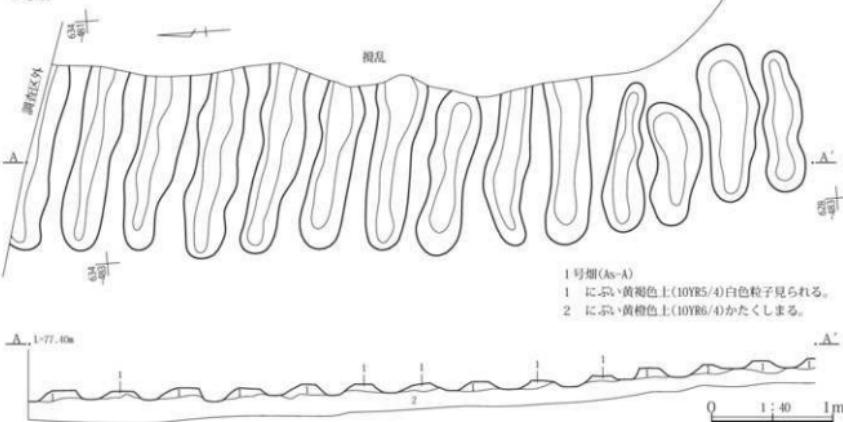
主軸方位 N-76°-W

検出・埋没状況 サクの埋没土にはAs-hが多量に含まれていた。歯は白色粒子を含むぶい黄褐色土で形成されている。

出土遺物 なし。

調査所見 埋没土および遺構の検出状況から、時期は天明3(1783)年以前と考えられる。

1号烟

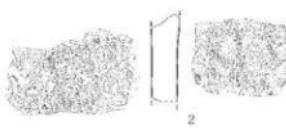
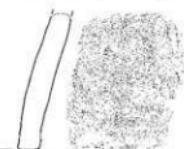


第45図 1号烟

(9) 遺構外出土遺物(第45・46図 PL.25)

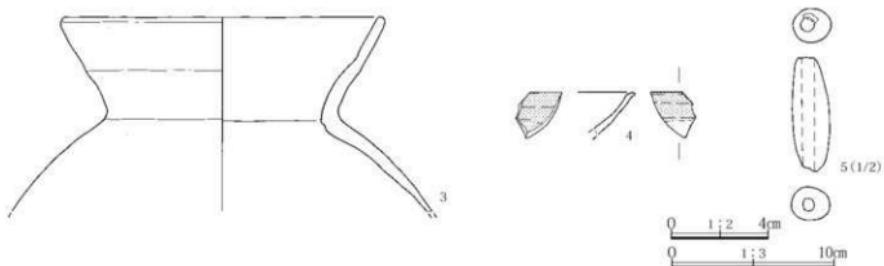
図示した遺物は、円筒埴輪底部片(第46図1・2)2点、土師器壺口縁～胴部片(第47図3)、灰釉陶器碗と思われる口縁部片(第47図4)、土錐完形品(第47図5)の計5点である。図示した土器のほかに、土師器片1452.0g、須

恵器片443.6gが出土している。このほか、中・近世以降の陶磁器片等5点を写真のみ掲載した。



0 1:3 10cm

第46図 遺構外出土遺物(1)



第47図 遺構外出土遺物(2)

第3表 山名土合跡 遺物観察表

種別 Pl. No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
			口	台			
第12回 Pl. 21	1 頭患器 皿	床面・カマド・ 埋没土 1/3	口12.6 底5.8	台5.6 高2.9	細砂粒・酸化塩/ にぶい黄	クロコ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第12回 Pl. 21	2 黒色土器 杯	埋没土 1/4	口14.0 底5.6	高3.9	細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩/にぶい黄 相	クロコ整形、回転は右回り。内面黒色處理は二次焼成によ り消失。底部は回転系切り無調整。内面は体部から口縁部 に放射状暗線。	
第12回 Pl. 21	3 頭患器 杯	埋没土 1/5	口12.2 底5.0	高3.8	細砂粒/還元塩/ 灰黄	クロコ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第12回 Pl. 21	4 頭患器 杯	埋没土 1/5	口12.6 底7.0	高3.7	細砂粒/還元塩/ 灰	クロコ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第12回 Pl. 21	5 頭患器 杯	床面 ほぼ完形	口12.6 底5.3	高4.0	細砂粒/還元塩/ 灰	クロコ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第12回 Pl. 21	6 頭患器 杯	埋没土 1/4	口13.0 底7.0	高3.6	細砂粒/還元塩/ 煙灰/灰	クロコ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。内 外面とも焼成。	
第12回 Pl. 21	7 頭患器 杯	床面 1/2	口13.0 底5.4	高3.8	細砂粒/還元塩/ 灰黄	クロコ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第12回 Pl. 21	8 頭患器 杯	埋没土 1/4	口13.4 底5.8	高3.8	細砂粒/還元塩/ 灰黄	クロコ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第12回 Pl. 21	9 頭患器 碗	埋没土 口縁部～底部片	口14.6 底5.7	台5.6 高5.0	細砂粒/還元塩/ 灰黄	クロコ整形、回転は右回り。高台は貼付。内外面とも焼成。	
第12回 Pl. 21	10 頭患器 碗?	+15 口縁部～体部片	口14.0		細砂粒/還元塩/ 灰黄	クロコ整形、回転は右回り。	
第12回 Pl. 21	11 頭患器 碗	+12 底部～体部 台6.2	底7.2		細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰白	クロコ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第12回 Pl. 21	12 頭患器 碗	+5 底部～体部 台6.5	底6.7		細砂粒/還元塩/ 灰黄	クロコ整形、回転は右回り。底部切り離し技法や整形は器 面磨滅のため不明。高台は貼付。	
第12回 Pl. 21	13 灰釉陶器 碗	埋没土 底部～体部片	底7.4 台7.0		微砂粒/還元塩/ 灰黄	クロコ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ。高台は 貼付。施釉方法不明。高台は明瞭な棱をもつ3月状張を呈す。	虎ヶ丘1号窯 式期
第12回 Pl. 21	14 上土器 甕	カマド瓶方2 口縁部～胴部上 片	口19.0 胴20.5		細砂粒/良好/に ぶい赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部に ヘラナデ。	
第12回 Pl. 21	15 上土器 甕	+3 口縁部～胴部上 片	口20.0		細砂粒/良好/明 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部に ヘラナデ。	
第12回 Pl. 21	16 上土器 甕	床面 口縁部～胴部上 片	口21.8		細砂粒/良好/明 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部に ヘラナデ。	
第12回 Pl. 21	17 頭患器 甕	+3 口縁部～頸部片	口41.5		細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰黄	クロコ整形、内外面とも回転ヘラナデ。口縁部は上方に引 き出され。口縁部下に断面三角形の凸部を貼付。	
第12回 Pl. 21	18 頭患器 甕	埋没土 大片	捕3.2		細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰	クロコ整形、回転は右回り。大片部は中ほどまで回転ヘラ 削り。捕は延びて株状を貼付。	認入品
第12回 Pl. 21	19 カマド下井 石	カマド下井面 石	長(11.8) 幅(13.8)	厚5.9 重約75.1	未固結灰岩//	2号窯穴建物IIと同質だが、素材の厚味が異なり。別個体と 見られる。片側が煤ける傾向は同じ。	
2号窯穴建物出土遺物							
種別 Pl. No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴		備考
第15回 Pl. 21	1 頭患器 皿	漏方 4/5	口13.4 底5.5	台6.7 高3.5	細砂粒・酸化塩/ 相	クロコ整形、回転は右回り。底部は回転系切り周囲を回転 ヘラナデ。高台は貼付。	
第15回 Pl. 21	2 頭患器 杯	+1 完形	口12.4 底5.6	高3.9	細砂粒/還元塩/ 灰黄	クロコ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第15回 Pl. 21	3 頭患器 杯	床面 底部～口縁部	底5.8		細砂粒/還元塩/ 灰黄	クロコ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第15回 Pl. 21	4 頭患器 碗	底部～体部	底6.4		細砂粒/還元塩/ 灰	クロコ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。底 部は疑似高台状を呈す。	
第15回 Pl. 21	5 頭患器 碗	床面 2/3	口13.8 底6.8	台6.2 高4.9	細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩/灰白	クロコ整形、回転は右回り。底部は回転系切りか。高台は 貼付。	
第15回 Pl. 21	6 頭患器 碗	掘方カマド+1 底部～体部下位	底7.0 台6.6		細砂粒/還元塩/ 煙灰/灰	クロコ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。 内外面とも焼成。	

種類 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第15回 PL.21	7	上部器 甕	埋没上、1・2壁 口縁部～胴部上 位片	口 18.6	細砂粒/良好/柾 木	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部に ヘラナデ。		
第15回 PL.21	8	上部器 甕	埋没上 口縁部～胴部上 位片	口 18.6	細砂粒/良好/に ぶい柾	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部に ヘラナデ。		
第15回 PL.21	9	須恵器 甕	力マド 胴部片		細砂粒/還元焰/ 灰オリーブ	叩き締め成形。外面は明き痕をナデ消している。内面は無 文アテ具痕が微かに残る。断面は酸化焰状態。		
第15回 PL.21	10	須恵器 甕	力マド+1、+3、 胴部片		細砂粒/還元焰/ 灰	叩き締め成形。外面は叩き痕をナデ消している。内面もア テ具痕をナデ消しているが痕跡が微かに残る。		
PL.21	11	カマド天井 石	カマド床面	長 (33.3) 幅 16	厚 8.1 重 3600.0	未固結凝灰岩	厚く板状に加工された切り石で、片側全面が黒く研げた。 被熱して全面にヒビ割が及んでいる。煤が付いていない船 上面には4cm程の工具痕が残る。	

3号竪穴建物出土遺物

種類 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第16回 PL.21	1	須恵器 甕	埋没上 口縁部～胴部片	口 13.9	細砂粒/還元焰/ 灰白	クロロ整形、回転は右回り。	
第16回 PL.21	2	上部器 台付甕	床面 台部～底部	底 5.0 台 10.0	細砂粒/良好/柾	台部は貼付。台部は横ナデ、底部はヘラ削り。内面は底部 にヘラナデ。	
第16回 PL.21	3	上部器 甕	カマド床面 口縁部～胴部片	口 16.8	細砂粒/良好/に ぶい柾	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	

2号土坑出土遺物

種類 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第19回 PL.21	1	陶文土器 蓋	埋没上 口縁部破片		和砂、赤色、 脚石/良好/	断面による口縁部稍円凹区画を施し、虹彫文を充填施文す る。器面摩滅著しい。	如曾利E3式

遺構外出土遺物

種類 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第21回 PL.21	1	陶文土器 蓋	埋没上 口縁部破片		粗砂/良好/	C字状爪形によるモチフを施す。器面摩滅著しい。	諸磯E式	
第21回 PL.21	2	陶文土器 蓋	埋没上 口縁部破片		粗砂、輝石/良好 /	断面による口縁部稍円凹区画を施す。器面摩滅著しい。	加曾利E3式	
第21回 PL.21	3	陶文土器 蓋	埋没上 口縁部破片		粗砂/良好/	断面による口縁部稍凹重文を施し、虹彫文を充填施文する。	如曾利E3式	
第21回 PL.21	4	陶文土器 蓋	埋没上 口縁部破片		粗砂、輝石/良好 /	断面による口縁部稍凹重文を施し、虹彫文を充填施文する。	如曾利E3式	
第21回 PL.21	5	陶文土器 蓋	埋没上 口縁部破片		粗砂/ふつう/	断面による口縁部稍凹重文を施す。器面摩滅著しい。	如曾利E3式	
第21回 PL.21	6	灰釉陶器 甕	埋没 底部～体部下位 片	底 8.4 台 8.0	微砂粒/還元焰/ 灰	クロロ整形、回転は右回り。底部は回転式切り、高台は貼付。 施釉方法不明。内面底部に重ね焼き痕が残る。	大原2号窯式 削	
第21回 PL.21	7	須恵器 羽釜	試掘1号トレンチ 口縁部～胴部上 位片	口 18.4 深 23.8	細砂粒/酸化焰/ にぶい柾	クロロ成形、回転右回り。甕は貼付。		
第21回 PL.21	8	大打石か ら	埋没上	長 2.5 幅 2.4	厚 1.7 重 11.5	石英	略方形形状を呈し、裏面側は平坦となる。火打石としてのエッ ジは有しているが、使用痕は不明瞭である。不純物を含み 良質石材とはいえない。	

第4表 根小屋赤堀遺跡 遺物観察表

1号竪穴建物出土遺物

種類 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第24回 PL.22	1	上部器 杯	床面 完形	口 11.6 底 8.2	高 3.3 粗砂粒/良好/柾	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。底 部中央に成形成の穿孔、径 2.5×2.0cm。	
第24回 PL.22	2	上部器 杯	床面、+3 1/3	口 12.4 底 8.0	高 3.4 粗砂粒/良好/柾	口縁部は横ナデ、体部は手平がナデ、下半と底部は手持ち ヘラ削り。	
第24回 PL.22	3	須恵器 杯	床面 武部片		高 5.5 粗砂粒/還元焰/ 黄灰	クロロ整形、回転は右回り。底部は回転式切り無調整。器 面磨滅のため單位不明鮮明。	
第24回 PL.22	4	須恵器 杯	床面 武部～体部下位 片		高 6.0 粗砂粒/還元焰/ 灰	クロロ整形、回転は右回り。底部は回転式切り無調整。	
第24回 PL.22	5	上部器 甕	床面 台部上半～底部		粗砂粒/良好/明 赤絶	台部は貼付。台部は横ナデ、底部はヘラ削り。内面は底部 にヘラナデ。	
第24回 PL.22	6	上部器 甕	口縁部～胴部上 位片	口 17.6	粗砂粒/良好/柾	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部に ヘラナデ。	
第24回 PL.22	7	上部器 甕	+3 口縁部～胴部上 位片	口 19.8	粗砂粒/良好/明 赤絶	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部に ヘラナデ。	
第24回 PL.22	8	上部器 甕	+3、+10、+14 口縁部～胴部上 半片	口 21.0 深 22.1	粗砂粒/良好/柾	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。器面磨滅のた め單位不明。内面は胴部にヘラナデ。	

3号竪穴建物出土遺物

種類 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第25回 PL.22	1	須恵器 杯	埋没上 天井部片		細砂粒/還元焰/ 灰	クロロ整形、回転は右回り。天井部は中ほどまで回転ヘラ 削り。瓶が貼付されていた痕跡が残る。	

探査 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土・焼成・色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第25回 PL.22	2	須恵器 杯	+3 1/4	□ 10.0 底 7.2	高 3.6 細砂粒・還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は手持ちヘラ削り。	
第25回 PL.22	3	須恵器 縁部	+4	□ 17.9	細砂粒・良好/に ぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
4号竪穴式建物出土遺物							

探査 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土・焼成・色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第27回 PL.22	1	須恵器 縁	+8 1/3	□ 14.8 底 7.5 高 2.0	細砂粒・酸化焰/ 浅黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付が削落。内外面の底部に線刻。	
第27回 PL.22	2	須恵器 縁	+3 3/4	□ 14.7 底 7.4 高 5.6	細砂粒・還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第27回 PL.22	3	須恵器 縁	+3 3/4	□ 17.4 底 7.4 高 6.3	細砂粒・還元焰/ 焼・黄灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。内外面とも焼成。	
第27回 PL.22	4	須恵器 縁	+3 3/4	□ 16.2 底 7.0 高 2.0	細砂粒・還元焰/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第27回 PL.22	5	須恵器 縁	+6 3/4	□ 16.8 底 6.4 高 2.4	細砂粒・還元焰/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切りが器面部滅めのため不規則。高台は貼付。	
第27回 PL.22	6	須恵器 縁	+6 3/4	□ 17.5 底 7.1 高 2.4	細砂粒・還元焰/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第27回 PL.22	7	須恵器 縁	+3 3/4	□ 17.6 底 7.6 高 2.4	細砂粒・還元焰/ 暗灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第27回 PL.22	8	須恵器 縁	+4 3/4	□ 17.0 底 7.1 高 2.4	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第27回 PL.22	9	上部器 小型甕	+5 1/2	□ 10.6	細砂粒・良好/相	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第27回 PL.22	10	上部器 甕	+5 1/2	□ 19.8	細砂粒・良好/相	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
5号竪穴式建物出土遺物							

探査 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土・焼成・色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第29回 PL.23	1	黑色土器 鉢	埋没上 底部～体部下位 1/2	底 6.0	細砂粒・酸化焰/ 明赤陶	内面黒色処理。体部と底部はヘラ削り。内面はヘラミガキ。	
第29回 PL.23	2	須恵器 縁	+2 1/2	□ 12.6 底 6.5 台 6.2 側 3.2	細砂粒・還元焰/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第29回 PL.23	3	須恵器 縁	+5 1/3	□ 14.0 底 7.7 台 7.2 側 3.0	細砂粒・還元焰/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデか、高台は貼付。	
第29回 PL.23	4	須恵器 床面	+2 1/2	底 7.0 台 6.7	細砂粒・還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第29回 PL.23	5	須恵器 縁	埋没上 天井部片	底 7.0 天井部片	細砂粒・還元焰/ 灰	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は回転ヘラ削り、中央換気口に焼成系切痕が残る。施は添付。	
第29回 PL.23	6	須恵器 縁	貯藏穴底面+3 1/2	□ 13.0 底 6.2 高 3.8	細砂粒・還元焰/ 焼・黒褐	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。内面とも焼成。	
第29回 PL.23	7	須恵器 縁	埋没上 無台輪 1/3	□ 13.0 底 6.5 高 4.0	細砂粒・還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第29回 PL.23	8	須恵器 縁	+14 4/5	□ 13.2 底 5.8 高 3.8	細砂粒・還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第30回 PL.23	9	須恵器 縁	埋没上 ほぼ完形	□ 13.5 底 6.0 高 4.1	細砂粒・酸化焰/ 相	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第30回 PL.23	10	須恵器 縁	埋没上 無台輪 1/2	□ 13.2 底 6.0 高 3.9	細砂粒・還元焰/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第30回 PL.23	11	須恵器 縁	埋没上 +3 4/5	□ 13.8 底 6.8 高 5.0	細砂粒・還元焰/ 黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第30回 PL.23	12	須恵器 縁	埋没上 1/4	□ 15.0 底 7.7 高 5.7	細砂粒・還元焰/ 灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第30回 PL.23	13	須恵器 底部～体部	埋没上 底部～体部	底 7.3 台 6.8	細砂粒・粗砂粒・ 礫(片岩)・酸化 焰/灰褐	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切りがほとんどナデ消されている。高台は貼付。	
第30回 PL.23	14	須恵器 縁	埋没上 底部～体部	底 7.0 台 7.0	細砂粒・還元焰/ 明褐色	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第30回 PL.23	15	須恵器 縁	埋没上 底部～体部	底 7.1 台 6.8	細砂粒・還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第30回 PL.23	16	灰釉陶器 頭部	埋没上 頭部～口縁部下 10片	頂 5.8	微砂粒・還元焰/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。外面に施釉、施釉方法不明。窓式期不明	
第30回 PL.23	17	須恵器 長颈壺	カマド床面 剥離部	□ 14.6 剥離部片	細砂粒・還元焰/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。	
第30回 PL.23	18	須恵器 壺	周溝底面+8 半片	□ 14.6 剥離部片	細砂粒・還元焰/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。胴部は回転ヘラナデ。	
第30回 PL.23	19	須恵器 壺	+6 1/2	□ 14.8	細砂粒・還元焰/ 灰黄	ロクロ成形か叩き締め成形か不明。内面に輪積み痕が残る。剥離部は内面ともヘラナデ。	
第30回 PL.23	20	上部器 甕	+3、-9、+10 口縁部～片位	□ 18.8	細砂粒・良好/相 灰	口縁部から頭部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第30回 PL.23	21	上部器 甕	カマド埋没上 口縁部～片位	□ 19.0 剥離部片	細砂粒・良好/相 灰	口縁部から頭部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第31回 PL.23	22	上部器 甕	埋没上 口縁部～片位	□ 22.2	細砂粒・良好/相 灰	口縁部から頭部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	

掃岡 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第31回 PL.24	23	須恵器 壺	埋没土 理段上 口縁部～胴部下位 片	底 15.0	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄	成形不明。底部は手持ちヘラ削り、胴部は回転ヘラ削り。 内面はヘラナデ。	
第31回 PL.24	24	土製品 土鍋	+23 壳形	長 4.5 幅 1.7	孔 0.2 重 10.7	細砂粒/良好/に ぶい黄褐	表面はナデ。
第31回 PL.24	25	土製品 土鍋	+6 壳形	長 4.3 幅 1.7	孔 0.7 重 10.8	細砂粒/良好/に ぶい黄褐	表面はナデ。
第31回 PL.24	26	土師器 壺	埋没土 口縁部～胴部上 位片	口 14.0	細砂粒/良好/淡 赤褐	口唇部は横ナデ、口縁部から胴部はハケメ(1cm当たり4本)、 古墳時代前 期、混入品	
第31回 PL.24	27	鐵石	埋没土	長 (14.2) 幅 (6.7)	厚 (6.2) 重 828.4	変質安山岩	三角形に近い断面形状を呈する棒状礫の小口部分に截打・ 削離痕がある。棒状礫は途中破損しているが、使用中不意 に破損したものと思われる。
PL.24	28	鐵石	貯藏穴床面+7	長 16.8 幅 6.4	厚 7.1 重 1066.5	粗粒輝石安山岩	上端側に直に鋸・截打・摩耗痕がある。 被熱して焼ける。
第31回 PL.24	29	石製品	床面	長 17.0 幅 12.9	厚 6.9 重 2122.8	安山岩凝灰岩	原さざれの切り石を用いたもの。表面側と右側面は焼成氣 味だが、裏面側は新鮮な分削面に見える。表面側および上 裏面に幅広の溝を削り、各面の溝は同一ライン上にあること から折削法のように見える。溝は上面側が大きくU字状 に掘られているが、最深部分は斜り様にV字状に削る。下 端部は被熱焼損したように黒く焼けているのにに対し、左辺 側は分割されたように継縫で、焼けていない。溝は切り石 を分割する際のガイドラインになりうるものであり、分割 目的等は明らかでないが、カマド構造材として転用された ものか不清楚。
PL.24	30	カマド天井 石か	埋没土	長 (15.6) 幅 (11.3)	厚 (8.6) 重 967.9	未固結凝灰岩	本来は厚く板状に加工されたもの。工具痕は部分的に分か る程度で、ほとんど分からぬ。片側は広く焼けている。 片側は極度に範囲が焼けるだけである。カマド天井石か。
第31回 PL.24	31	鐵製品 鐵鍔	床面 1/2	長 (5.9) 幅 3.8	厚 1.0 重 18.4	無	塊又鍔、表面が粗く、某の端部の断面形は幅の狭い長方形 となっている。

6号堅穴六状遺構建物出土遺物

掃岡 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第32回 PL.24	1	黑色土器 壺	カマド床面+7 1/2	口 15.6 底 5.9	台 7.4 高 5.5	細砂粒・酸化焰/ 灰黄	クロロ整形、回転は右回り、内面黑色冠理。底部は回転ヘ ラナデ、高台は貼付。内面は墨画質のため成形不鮮明。
第32回 PL.24	2	須恵器 壺	カマド床面+10 1/3	口 14.0 底 7.0	台 6.0 高 5.0	細砂粒・酸化焰/ 灰黄	クロロ整形、回転は右回り。底部切り離し技法や成形は不明、 高台は貼付。
第32回 PL.24	3	須恵器 武部～体部	カマド床面 武部～体部	底 5.4 台 5.9	細砂粒・酸化焰/ 灰黄	クロロ整形、回転は右回り。底部切り離し技法や成形は不明、 高台は貼付。	
第32回 PL.24	4	須恵器 武部～体部	カマド床面+10 武部～体部	底 7.0 台 6.6	細砂粒・酸化焰/ 灰黄	クロロ整形、回転は右回り。底部切り離し技法や成形は不明、 高台は貼付。	
第32回 PL.24	5	須恵器 壺	カマド床面+7 1/2	口 15.2 底 5.8	台 7.0 高 5.8	細砂粒・酸化焰/ 灰黄	クロロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデか、器面 墨画のため不鮮明。高台は貼付。
第32回 PL.24	6	須恵器 壺	カマド床面+4 元形	口 16.3 底 7.6	台 7.0 高 6.2	細砂粒・酸化焰/ にぶい黄褐	クロロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。 外面部の一部に煤が付着。
第32回 PL.24	7	灰陶陶器 壺	埋没土 1/4	口 13.2 底 6.6	台 6.4 高 2.6	微砂粒・還元焰/ 灰白	クロロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。 施釉方法は掛け掛け。高台は三日月状であるが接は 丸みをもつ。
第32回 PL.24	8	灰陶陶器 壺	埋没土 口縁部小片	底 6.6	灰白	微砂粒・還元焰/ 灰白	クロロ整形、回転は右回り。施釉方法不明。口部の外反 はみられない。
第32回 PL.24	9	須恵器 羽釜	カマド床面 武部～胴部下 位片	口 21.8 底 26.5	細砂粒・粗砂粒/ (褐色粒)・酸化 焰/暗褐	クロロ成整形、回転右回り。内面は胴部にヘラナデ。	

1号堅穴六状遺構建物出土遺物

掃岡 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第33回 PL.25	1	須恵器 杯	+15 1/4	口 13.7 底 7.6	高 3.6 高 3.3	細砂粒・還元焰/ 灰黄	クロロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。底 部は疑似高台状を呈す。
第33回 PL.25	2	須恵器 杯	埋没土 口縁部～胴部片	口 12.9	細砂粒・酸化焰/ 灰黄	クロロ整形、回転は右回り。	
第33回 PL.25	3	須恵器 杯	埋没土 武部～体部片	底 6.0	細砂粒・酸化焰/ 灰黄	クロロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。口 縁部が欠損歴を打ち欠き内調整し使用か。	

2号堅穴六状遺構建物出土遺物

掃岡 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第34回 PL.25	1	須恵器 杯	床面 1/3	口 13.4 底 5.7	台 5.2 高 3.3	細砂粒・酸化焰/ にぶい黄褐	クロロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデか、器面 墨画のため不鮮明。高台は貼付。
第34回 PL.25	2	須恵器 杯	床面 口縁部～底部片	口 13.0 底 5.0	高 3.8	細砂粒・還元焰/ 灰黄	クロロ整形、回転は右回り。底部は回転系切りか。底部は 器面墨画のため不鮮明。
第34回 PL.25	3	須恵器 杯	床面 武部～体部片	底 7.8	細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/灰オリーブ	クロロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデか、器面 墨画のため不鮮明。高台は貼付。	

3号堅穴六状遺構建物出土遺物

掃岡 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第35回 PL.25	1	須恵器 杯	床面 脚部	口 13.2	細砂粒・還元焰/ 灰黄	叩き締め成形。外面には平行引き痕、内面に同心円状アテ ム痕が残る。	

4号堅穴六状遺構建物出土遺物

掃岡 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第36回 PL.25	1	須恵器 杯	埋没土 口縁部片	口 15.8 力 13.2	細砂粒・還元焰/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。大井部は回転ヘラ削り。内面 にはカギ穴が作られている。	

種別 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第36回 PL.25	2	須恵器 杯	床面 底部～体部片	底8.0	細砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラ削り。	
第36回 PL.25	3	須恵器 甕	床面 底部～胴部下位		細砂粒/還元焰/ 灰	叩き締め成形後ロクロ整形、胴部には平行叩き痕が微かに 残る。	

7号堅六状遺構出土遺物

種別 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第39回 PL.25	1	須恵器 甕	埋没上 胴部上位小片		細砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形、回転方向不明。内面はヘラナデ。径3.6cmほど の孔が穿たれている。	
2号土坑出土遺物							
種別 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第39回 PL.25	1	須恵器 甕	埋没上 胴部下位片		細砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形、回転右回り。胴部は下位に回転ヘラ削り、 中位は回転ヘラナデ。内面は回転ヘラナデ。	

7号ピット出土遺物

種別 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第41回 PL.25	1	灰釉陶器 甕	埋没上 口縁部片		微砂粒/還元焰/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。体部に回転ヘラ削り。施釉方 法不明。口縁部は外反。	光ケ丘1号窯 式期

1号溝・2号溝出土遺物

種別 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第42回 PL.25	1	須恵器 甕	1号溝埋没上 1/4	口13.6 底5.3 高5.4	細砂粒/還元焰/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は 貼付。	
第42回 PL.25	2	須恵器 甕	1号溝埋没上 底部	底7.6 台7.0	細砂粒/酸化焰/ にぶい黄鉄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデか器面磨 減のため不明、高台は貼付。	
第42回 PL.25	3	須恵器 無台輪	2号溝埋没上 底部～体部下位 片	底6.5	細砂粒/酸化焰/ 黄灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第42回 PL.25	4	灰釉陶器 甕	2号溝埋没上 底部片	底7.8 台7.0	細砂粒/還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は 貼付。内面底部に重ね燒き痕が残る。	式期不明
第42回 PL.25	5	灰釉陶器 甕	2号溝埋没上 口縁部上位片		微砂粒/還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。施釉方法不明。	東晉産、10 世紀代

1号流路出土遺物

種別 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第43回 PL.25	1	埴輪 円筒	埋没上 基底部片		細砂粒/酸化焰/ にぶい黄鉄	外面はハケメ(1cm当たり6本)、内面はヘラナデ。	

AS-A処理遺構・4号トレンチ出土遺物

種別 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.25	1	鐵石	As-A処理遺構 埋没上	長12.6 幅3.3 0.138.8	雲母石英岩	上端側小口部が最打して潰れる。その他の使用痕は不明瞭。 跡状跡	
第43回 PL.25	2	鐵製品 不明	As-A処理遺構 埋没上 部欠損	縦3.0 横3.0 重9.0		半円形の両端部が折り曲げられている鉄製品。浪津御所遺 跡の近世の面からも同様の遺物が出土しているが用途は不明。 明。	
第44回 PL.25	3	須恵器 甕	4号トレンチ埋 設上 口縁部片		細砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ成形。口縁部下に断面三角形の小凸点を造る。口縁 部は2条の門線による区画。区画の上下には波状文を施す。	

遺構外出土遺物

種別 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第46回 PL.25	1	埴輪 円筒	埋没上 基底部片		細砂粒/粗砂粒/ 酸化焰にぶい黄 鉄	外面は縱方向のハケメ(1cm当たり6~7本)。内面はヘラナデ。		
第46回 PL.25	2	埴輪 不明	埋没上 円筒部小片		細砂粒/還元焰/ 暗灰	外面は縱方向のハケメ(1cm当たり本数不鮮明)。内面はヘ ラナデ。形象埴輪の円筒部分。		
第47回 PL.25	3	土師器 甕	埋没上 口縁部～胴部上 位片	口19.6	細砂粒/良好/明 赤鉄	口縁部は横ナデ、胴部は内外面とも器面磨減のため成形不 明。口縁部は中ほどで屈曲。		
第47回 PL.25	4	灰釉陶器 甕	埋没上 口縁部片		微砂粒/還元焰/ 灰黄	ロクロ成形。口縁部下に断面三角形の小凸点を造る。口縁 部は横ナデ、胴部は僅かに外反。	光ケ丘1号窯 式期	
第47回 PL.25	5	土製品 圓形	埋没上 底	長4.7 径1.6	孔0.5 重9.7	細砂粒/良好/に ぶい褐	表面はナデ。	
PL.25	6	更前磁器 甕	埋没上 口縁部片	口(9.0)	器一 底一	白/灰白/	外面染付。口縁部内面1重継線。	18世紀
PL.25	7	更前磁器 甕	埋没上 底部1/4	口一 底8.0	器一 底一	/白/	内外面染付。口縁部外反。	19世紀
PL.25	8	製作地不詳 甕	埋没上 口縁部一部、底 位	口(7.8)	器2.8 高6.8	/白/	外面酸化コバルトによる染付。口縁部内面と高台外面無 釉。	近代
PL.25	9	在地系上器 窑	埋没上 口縁部片	口一 底一	器一 底一	/白/	口縁部内面に折り返す。	江戸時代
PL.25	10	坂平陶器 甕	埋没上 口縁部片	口一 底一	器一 底一	/淡黄/	器表面黄褐色。内外面施釉。たらい形の鉢。	近代

第5章 総括

第1節 調査の成果

山名土合遺跡(以下土合遺跡)・根小屋赤沼遺跡(以下赤沼遺跡)は、岩谷谷丘陵から流れ出た柳沢川が形成したと考えられる小扇状地の端部に位置する。両遺跡で確認された遺構の時期の中心は、奈良・平安時代である。7世紀末から8世紀第1四半期1棟、9世紀第3四半期3棟、9世紀第4四半期3棟、9世紀後半1棟、詳細時期不明2棟の計10棟である。これらの竪穴建物は、小扇状地の端部に位置しているため、集落の中心は、遺跡地よりも南に存在したと考えられる。

近年、遺跡のある高崎市山名町周辺では開発に伴う発掘調査例が増えている。そこで、本遺跡から検出された平安時代の竪穴建物と周辺遺跡の集落の動向を概観することとする。

第2節 遺跡周辺の奈良・平安時代

高崎市山名町は、倭名類雅抄の多胡郡山宗(当初は山部)郷(也末奈)に比定されている。上野三碑の一つである多胡碑には、711年に上野国片岡郡、緑埜郡、甘樂郡の中から300戸を分けて多胡郡がつくられたことが記されている。また、山名町には上野三碑の山上碑(681年)と金井沢碑(726年)が保存されている。

周辺には奈良・平安時代の遺跡が点在している。調査された遺跡は次の通りである。

田端遺跡 古墳時代から続く集落で、奈良時代16棟、平安時代約160棟が調査された。8世紀終末から9世紀中頃まで空白期間があるが、9世紀中ごろから竪穴建物が増加し、11世紀まで継続する。特に10世紀以降の増加が目立つ。



第48図 山名土合遺跡・根小屋赤沼遺跡周辺の奈良・平安時代の遺跡(国土地理院2万5千分の1地形図「高崎」を加工)

山名戸矢遺跡(以下戸矢遺跡) 106棟の竪穴建物のうち、奈良・平安時代68棟で、8世紀から10世紀までの集落が営まれている。87号竪穴建物からは、「辛枚万呂」と焼成前に刻書された男瓦が出土している。「辛」は多胡郡辛科郷、「枚万呂」は人名との説が有力である。

山名原口I遺跡(以下原口遺跡) 奈良・平安時代の竪穴建物50棟が調査された。8世紀前半から10世紀中葉までの集落で、山名古墳群と隣接している。古墳時代の竪穴建物は検出されておらず、奈良・平安時代の竪穴建物は古墳を避けて確認されている。

山名柳沢遺跡(以下柳沢遺跡) 前述の遺跡が小扇状地や川の氾濫原に立地しているのに対し、当該遺跡は岩野谷丘陵の南東端の緩やかな緩斜面上で10世紀前半の竪穴建物を中心に約40棟検出された。

第3節 集落の動向

(1) 8世紀前半

7世紀から継続して、建物が検出されているのは、田端遺跡と戸矢遺跡である。

赤沼遺跡の南100mには山名土合古墳群、原口I遺跡に隣接して山名伊勢塚古墳を中心とする山名古墳群が形成されている。この地域周辺はまだ墓域としての認識があったと考えられ、その周辺に竪穴建物が散見するようになる。

(2) 8世紀後半～9世紀前半

この時期の竪穴建物は極めて少ない。8世紀後半の竪穴建物は原口I遺跡で2棟、赤沼遺跡で1棟確認されている。9世紀前半の竪穴建物は原口I遺跡2棟のみである。

(3) 9世紀中～後半

各遺跡での竪穴建物棟数は回復傾向にある。土合遺跡・赤沼遺跡の6棟は、この時期にあたる。田端遺跡では、15棟と竪穴建物が増加している。岩野谷丘陵の緩斜面にある柳沢遺跡でも竪穴建物が1棟確認され、戸矢遺跡で1棟、原口I遺跡で2棟が検出された。

(4) 10世紀以降

各遺跡で竪穴建物の増加が顕著である。戸矢遺跡で3棟、原口遺跡で7棟、柳沢遺跡で6棟検出されている。これら3遺跡は10世紀前半にピークを迎える。また、田端遺跡では10世紀～11世紀にかけて77棟の竪穴建物が

確認されている。

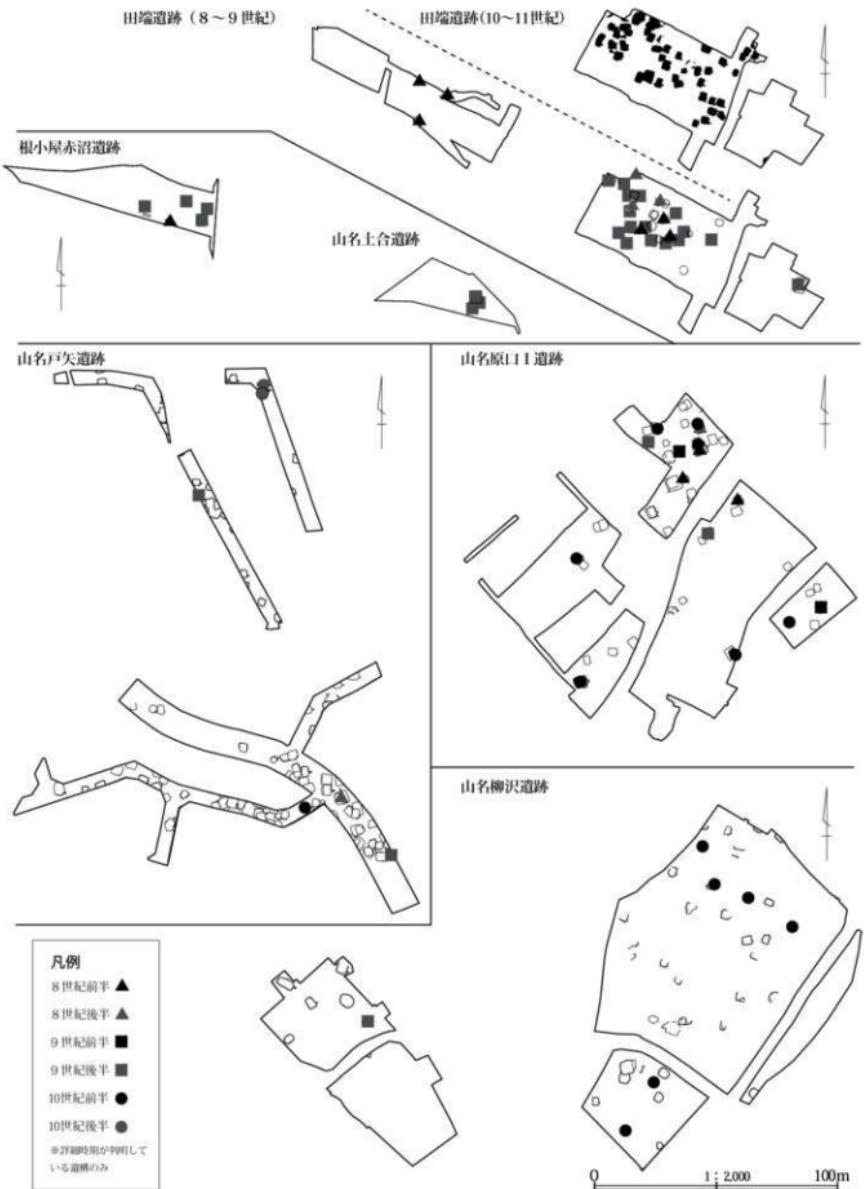
(5)まとめ

8世紀後半から9世紀前半にかけての集落の減少は、山名周辺の遺跡の共通の事象であると捉えることができる。この原因について田端遺跡の考察編では、8世紀末から9世紀中ごろまで竪穴建物が減少した理由を、「空白の直接の原因は洪水による生産域の壊滅、台地の分断」としている。対照的に鳥川対岸の佐野地域や錦川対岸の藤岡では、この時期にも集落が営まれていることが報告されている。

山名土合遺跡・根小屋赤沼遺跡と周辺遺跡の発掘調査成果から、奈良・平安時代の多胡郡山宇郷の集落の変遷の一端を明らかにすることができた。山宇郷の全容を解明するには極めて限定的なデータである。今後の調査例が増加した時には、改めて今までの調査を再考する必要があろう。

引用・参考文献

- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1988「田端道路」
- 高崎市教育委員会1990「山名原口I遺跡」
- 高崎市教育委員会1993「山名戸矢遺跡」
- 高崎市教育委員会2003「山名伊勢塚古墳群」
- 高崎市遺跡調査会1998「山名柳沢遺跡」
- 高崎市史編さん委員会1999「新編 高崎市史 資料編Ⅰ」
- 高崎市史編さん委員会2003「新編 高崎市史 通史編Ⅰ」
- 多胡岬記念館2018「山上岬の世界」
- 多胡岬記念館2020「金井沢碑の遺産」
- 熊倉浩2017「上野三郷を読む」
- 松田猛2017「上野三郷」
- 国立国会図書館デジタルコレクション(<https://dl.ndl.go.jp/>)「倭名類聚 手 20巻」



第49図 山名土合遺跡・根小屋赤沼遺跡周辺の奈良・平安時代の立穴建物分布図